

一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10-10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42-0211
定価 1部 200円
橋本清文堂

母校創立 九十周年記念 特集号

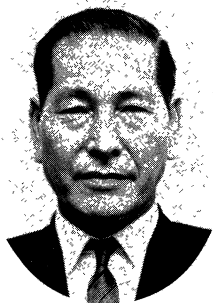
創立九十年の伝統と誇り

関東一泉同窓会会長

浦

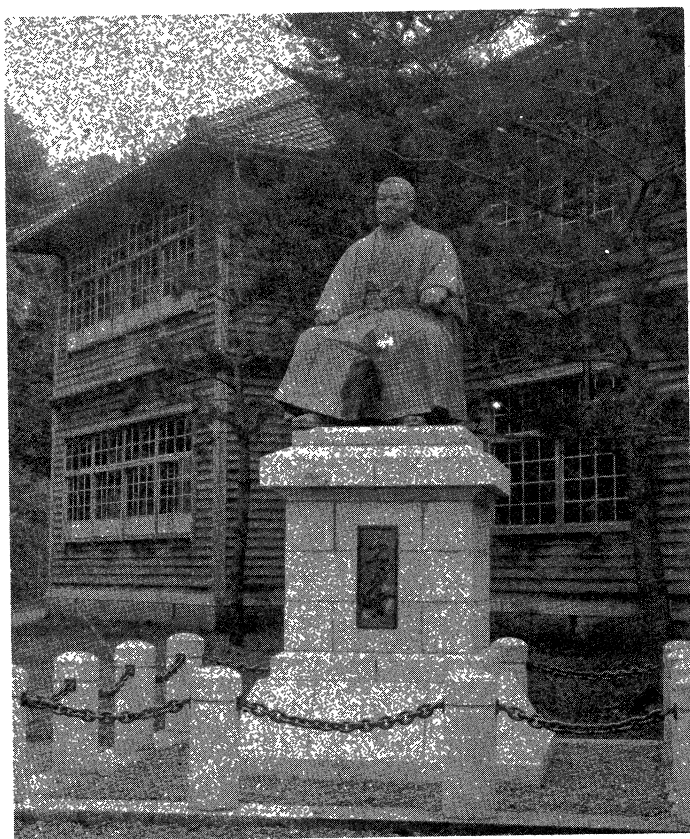
茂

(一中三十四回卒)



卒業生三万有余、毎年三五〇名の新進を加えている私共の母校は、待望の新校舎も完成し、ここに創立九〇年を迎えた。地元石川県に次ぐ多数の卒業生を擁する関東一泉同窓会の各位と共に、心から慶祝申し上げます。

私共は誰しも、金沢一中や泉丘高校に学んだことに強い郷愁と誇りをもっている。明治、大正、昭和と激動の時代を経て、戦後の学制改革に



も断絶することなく、九〇の年輪を重ねた伝統の精神と、郷土北陸の風土に培われた豊かな個性が、母校の校風と同窓生を育ててくれたように思う。そしてその本質は漲る勉学心

と陶冶性でなからうか。最近発表された国公立二二大学への泉丘からの進学、合格率に象徴される向学心、それに社会のあらゆる分野に活躍しておられる同窓の質実にして環境に適応する姿に窺われる陶冶性、ここに一泉の特色があるように感ずる。

若さに萌える泉丘生に「科学に挑戦する勇氣」を示唆した木村珪二氏の「逆流」の像などが精神的支柱となつて、私共の心底を照らしている。また、厳霜碑文を書かれた前田利為氏は百万石の後裔、四十年前にボルネオで鰐狩りに連れていって戴いた私の郷兄の大先輩、このような先輩先人の母校や卒業生に対するご指導とご眷顧の積み重ねがあり、また星霜九〇年、師弟一如となつて校風を磨き、共に学窓に励んだ連綿たる結実でもあらう。

関東一泉同窓会は当然のことながら、官界、財界、学界、芸術文化等、あらゆる社会の人材を網羅しており、極めて多彩である。特に明治、大正、昭和と三世代にわたって、先輩と若い新進が親和同心の雰囲気をかもしていることは「力を合せ睦み合い世の荊棘を拓くべし」の校歌そのものが顕現されているように思う。この九〇周年を壽ぐと共に、これの一つのふしとして母校の発展を願ひ、同窓同友が気楽に集り、懐しく語り、胸襟を開く触れ合いの場を広め、とくに若い方々の潑刺とした着想で、同窓の輪を広めたいとお願いいたします。

「二泉」第九号によせて

泉丘校蔵書解題目録の

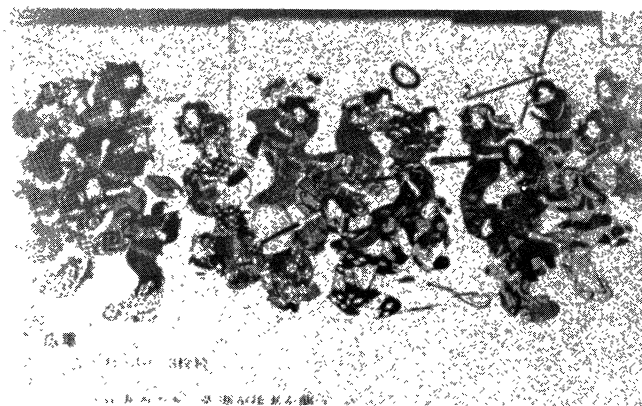
編集を終えて (6)

後妻打(うハなりうち)

山 森 青 楓

(一中三十三回卒)

泉丘校書庫内に「烹櫛の記」と云う書物がある。是は三卷三冊、和装26×18、有名な滝沢解(馬琴)の著であり、文化八年(一八一)の刊である。序文には著者蓑笠陳人の他に、亀田鵬斎と岩瀬京山が顔を並べている。随筆「日本随筆全集、日本随筆大成、百家説林」等に収められている。此の泉丘本は原本原装であるが、非常に疲れひどく、全冊裏打補修してある。其手入状態を見ても其の稀観性が窺われる。序の次に「賃本、片町石井」の印、又別に「書物売買、加州金沢賃本所越前屋彌兵衛」の印がある。蔵書印「石川県立第式中学校蔵書之章」。扱本書の上巻に「善知鳥」下巻に「後妻打」の項がある。是は加賀宝生金城湯池の場所としては、謡曲解説として見逃してはならぬ馬琴説である。本稿では前記「後妻打」を解説してみよう。



謡本「葵上」のツレ(照日の神子)の役謡に、次の一句がある。

あら浅ましや六条の。御息所程の御身にて。うハなり打ちの御ふるまひ。いかでさる事の候べき。唯思し召し止り給へ。

謡本「三山」の末葉地に

花のうハなり打たんとて。桂の立技を折り持ちて。耳無の山風。松風春風も。吹き寄せて吹き寄せて。雪と散れ桜子。雲となれ桜子。花は根にかへれ。我も人知れずねたさも妬しうハなりを。打ち散らしうち散らす。

とある。右文中「うハなり」又は「うハなり打ち」の句が載っている傍線の処。筆者は長らく此語句の意を解せなかった。今泉丘本を読破して始めて解った。「大言海」には

うわなりうち(後妻打)。前妻が後妻の家へ押しかけて、後妻と打ち合う女の騒動打(そうどううち)のこと。前妻を離別して一か月もたたない間に、後妻を迎えたとき

前妻は仲間をさいていあわせて、後妻の家に押かけ、家具や台所道具などを破壊するだけでなく、後妻やそのもとにいる女中などをなぐりつけるといことが行われていた。これは平安時代にもあったし、中世にも行われていた。とくに戦国時代にさかんであった。(宝物集)(今昔物語)(骨董集)。その他にこれが見えている。必ずしも女性のねたみの原因であったのではない。当時の婚姻が妻問婚(つまどいこん)で、男が女のもとに通う形式であったために、或る女に通った男が、他の女のもとに通う様になると、前女が彼の女のもとに押しかけて、後の女をこらしめたのである。

とある。大和田建樹「謡曲通解」は「うハなりうち」(うハなり)は後妻を云ふ。男前妻を離別して後妻を迎へし時は、前妻が途中に待

ち伏せて後妻を打擲し、嫉妬の恨を晴す風俗、足利時代に流行せしを、ここに用ひて云ふ。

とある。本稿は馬琴著の書物の一項「後妻打」である。馬琴が前文中に「七十年ばかり以前に八十許の婆々ありしが、我等のわかき時分は、騒動打に十六度たのまれて出しとて語りし。百年ばかりこなたには透とこの道相止たり」

とあるから、馬琴の世には絶えていたが、七十年ばかり前には盛に実施されていた事実を物語っているものである。竹刀のみ持ち、木刀や危険物を禁じていたのであるから、当時の町奉行所等も公に認めていた一つの民俗資料には違いない。

我が百万石前田藩、金沢にも「うちこみ」と云う嫁どり(金沢では往時結婚式と云わず)日のしきたりがあった。新嫁が入る時近所の人が見に行き、其祝家に石を投げ込む習慣を云うのである。それは長く新嫁がその家に居付く意味にて石を投げ、嫁を他に出さぬ善意であった。それがいつしか、見物人に嫁の恋敵が混って入り込み、新嫁の向顔に石を強く投げ当る習慣に変わったのである。本稿に云う「うハなりうち」も実にうまく、我邦往古民俗資料を描写してある。

本書は馬琴(解)自身が発刊に踏

切ったものでなかった。当時有名だった亀田鵬斎が勝手に文化八年（一八一）一）発刊した。後程馬琴が事後承諾と云う形になったものである。（自序により）馬琴は衆知の如く、徳川時代の戯曲家で、滝沢与邦、後名を解と改めた。別号が非常に沢山ある。亭々亭、鳥水、曲亭馬琴、信天翁、蓑笠陳人、狂斎等と云っている。本稿自序も「蓑笠陳人、解識」となっている。明治四年（一七六七）

六月九日江戸深川高松通浄心寺附近に生れ、嘉永元年（一八四八）十一月六日歿す。享年八十二才。著書非常に多く、生涯の労作「南総里見八犬伝」が余りにも有名である。謡本所載「うはなりうち」解説は、古来色々異説があつて其の帰趨不明であつたが、最近本稿馬琴の解が最も当を得ていると称される様になった。

又此の我邦戦国時代風俗（うはなりうち）がウナリ（うはなり）歌舞伎劇の題名で、市川団十郎代々の当り芸として、有名な歌舞伎十八番の一に数えられる様になった。「平凡社刊大百科」は左記の如く述べている。

元禄十二年（一六九九）七月江戸中村座に上演せられた「甲賀三郎鬼神退治一心五男王」なる狂言は、元祖団十郎（筆名三升屋兵庫）の作で、その第三番目に嬾の條があ

つて元祖は自ら甲賀三郎に扮し、好評を得たに始まると見てよい。元来嬾（うはなり）なる題材は、室町時代に行はれた風俗の嬾打（うはナリウチ）に起因して、これより早く発表された近松門左衛門作の浄瑠璃、戯曲「花山院石浄」にも取扱はれ、後には「弘徽殿嫉妬打」などと改作もされている。然し所謂歌舞伎十八番としては記録の上に伝はっているに留まり、脚本は現存していない。

とある。馬琴は泉丘本附評には「孝女女扇」を載せているが、本稿では略しておこう。

（昭和55・9「宝生」29巻9号）



母校創立九十周年記念

吾々校章健児が青春の日を謳歌した母校旧金沢一中は明治二十六年、輝やかしい未来をその名にひめて生誕しました。爾来、幾多の俊英、有為の人材を輩出しつつ光輝ある伝統を後世に伝え、戦後、学制改革に伴い金沢第一高等学校、金沢泉丘高等学校と名称は変更されましたが、その伝統はそのまま校章に校風にと象徴され泉野原頭を圧する新校舎と共に全校生徒千二百余名の若人の魂の裡に生きているのであります。

また同窓会も昭和三十年金沢一中、

金沢一高、金沢泉丘高校を併せて新たに一泉同窓会を設立し、先輩後輩の情誼、愈々こまやかに隆々たる発展を続けて今日に至りましたことは母校のため、まことに同慶に堪えぬところであります。

この母校々舎が、このたび老朽化と施設の不備により新装改築の議が起り、去る昭和五十五年を初年度とし改築の運びとなり、この程普通教室棟、特別教室棟及び管理棟の完成をみ、その全校舎の全様を一変するに至りました。

一方、この母校に新たな輝やかしい歴史の一頁を加うべき記念を迎えようとしております。即ち本年は母

校創立九十周年にあたり伝統にかがやく母校が九十周年を迎えることは洵に欣快、慶祝の至りであります。私等はこの機に際し、次の事業を計画し母校永遠の発展のため微力を捧げたいと思います。

何卒、皆様におかれては右の趣旨に御賛同下さいまして格別の御協力を賜りたくお願い申し上げます。

記

- 一、富田輝象初代校長の胸像再建
- 一、同窓会々員名簿の発行
- 一、母校改築完成記念事業への協賛
- 一、物故会員の慰霊祭
- 一、九十周年記念式典及び祝賀会
- 尚、当日の日程予定は左記の通りです。

記

母校創立90周年記念

昭和五十九年十月十五日（月曜日）

- 一、受付 午前十時より 於学校玄関前
- 一、物故会員慰霊祭 午後十二時三〇分より 於厳霜碑前
- 一、初代校長 富田輝象先生胸像除幕式 午後一時より 於校庭胸像前
- 一、記念式典 午後一時三〇分より 於学校講堂
- 一、記念祝賀会（総会）午後四時三〇分より（祝賀会）午後五時より 於金沢ニユーグランドホテル（会費五〇〇〇円）以上

昭和五十九年六月

石川県立金沢泉丘高等学校
創立九十周年記念事業委員会
同窓会長 宮 太郎
実行委員長 竹田 長松

同窓の随想

第二十回卒業生として

三須 武男

(一中二十回卒)

今同期生で、東都在住の者六人となりました。飯本信之、土田兵吾、山本可武、谷恵吉郎、蚊野豊次、三須武男です。この前にも一寸申し上げました通り、その内、前の三人が当時身体故障して居ましたので、動ける後の三人が、都合つき次第第一所になって、御見舞しようではないかと始めましたが、仲々簡単にはかどらず、全部終了せぬ裡に、今度は、後の三人全部も体に故障し居る様な次第となりました。

顧りみますと、本年は、石川県立金沢泉丘高等学校創立九十周年を迎えまして、同窓会誌「一泉」も第九号を発刊の由承わり、今日迄皆様方の一方ならぬ御支援で、生残らしていただきましたことを、深く感謝申し上げますのですが、考えますと我々第二十期卒業生の大半は、九十歳前後の者共ですので、誰かが申しました通り九の重なること三つ、それは「サンキュ」だ。成程そうかなーと感じ居る次第です。

台湾に残る

ただ一つの日本人の

しかも石川県人の銅像

小堀 保行

(一中二十六回卒)

この二月四日正午、東京四高会が

銀座ライオンで八十余名集めて行われた。その席で昭和十七年卒の丹沢一延氏の講演の題で、自分は人の誠意と云うものは如何に大きな力のあるものかと深く感銘した。自分だけで感激しているだけでは余りに惜しい。恐らくこの事実を知っている同窓並びに郷土の方々が案外少いのではないか、この誇るべき我等の先輩の輝かしい業績を又私の感激をお伝えしたいと拙な筆をとった。このことを詳述しているのは台湾の作家謝新発の「誰にも書けなかった台湾」の著で戦時日本の軍国的統治、日本人の台湾人に対する色々の行為を批判している中でこの日本人、八田与一氏だけは一生を嘉南平野の開発に捧げ異国人ながら我等の父と呼ぶべきだと叫んでいる。

その八田与一氏は明治十九年二月二十二日石川県河北郡花園村で生れ明治三十七年金沢一中を経て明治四十年七月四高二部工科を卒業、明治四十三年東大工学部土木科卒業、同年八月二十四歳で台湾総督府土木局

技手になった。それから約十ヶ年、氏は桃園大圳(圳とは人工の灌漑用の溝)の構築工事に泥まみれになっていた。この時天から降ったように嘉義庁長等から嘉南平野十四万五千ヘクタールの給水問題を解決してくれと強く請願して来た。

総督府は無下に断りかねて八田技師にこの調査を命じた。氏は大正八年二月から総督八十余名のスタッフを率いてこの大荒野の隅々まで酷暑と疫病とにさいなまれながらも不眠不休でつぶさに調査し、同年十月土木局に土木局も驚いた程の立派な設計書を提出した。即ち一三一キロの

曾文溪と台湾一の長川一八六キロの濁水溪から人工の溝で引水し、嘉南十四万五千ヘクタールの荒田畑の欠水問題を解決するプランで工事費約五千三百万円を要する計画だった。当時の台湾総督府の年予算が約五千万円だったからその規模が如何に当時としては大きかったか、総督府開設以来の大工事計画だった。時の総督は八代目、初めての文官、田健次郎氏であった。総督府当局は勿論難色を示したが南部各庁長の熱心な運動、八田氏の飽くまない熱意、田総督の理解ある支持とで遂にこの一大計画は十ヶ年の継続事業として認められたのであった。八田氏はこの工事に骨を埋める決意でとりかかった。

この嘉南大平野は台湾の西南に位置し東西七十一キロ、南北八十六キロ、台湾の全耕地面積の四十一・五%強を占める大曠野で当時はその殆んどが水利に恵まれず北の曾文溪又は濁水溪から水を引くなどは全く絵空事と思われていた。清朝百数十年

来毎年特有の長梅雨が綿々として続けば川溝は氾濫して一面の泥海となるかと思えば乾期に入ると砂漠が濛々として天を覆う有様で、又海に近い田畑は海が荒れると田畑に潮がの上り台風時には常に可成り奥地まで津波が農作物をあとと云う間にさ

らって行く有様だった。八田氏は魔につかれたように家へもよく帰らず嘉南大圳の大工事に没頭した。大正九年九月一日には烏山頭工務所長並に監督及工務課長に任ぜられこの大工事の責任を一人で背負って終った。氏は工事事務所又は現場に労働者と寝食を共にし為に数千の労働者は氏を親や兄の様に親し慕い氏のために犬馬の労を厭わなかった。かくて工事は幾多の障害、困難を乗り越えて順調に進み十ヶ年の歳月を経た昭和五年四月二十九日の天皇誕生日に遂に落成し、彼は三十四歳から四十四歳の白髪まじりの中年になってしまっていた。ダム

の長さは一、二七三メートル、高さ五六メートル、底幅三〇三メー

トル、貯水量一億三十七万立方メートル、水面面積一三〇〇ヘクタール、南北二本の主な給水幹線九八キロ、支線一二〇キロ潮水の防潮堤一〇四キロに及び、しかも当時の工事は殆んど人力によって行われたのでその困難は筆舌を絶するものだった。

かくて農産物の収穫は一挙に四・二倍になり供水区域は嘉義嘉南の二県に跨がり十五万戸百万の農民がこの恩恵に随喜の涙を流したのだった。氏の徳を慕い一介の土木技師八田与一氏の銅像建設の議が工事関係者主要農民等五八八名によって自然に涌き上り、氏が固辞したに拘らず話纏まり昭和三年工事竣工前に東京で彫刻家吉田三郎氏で作られ、工事竣工の時烏山頭ダムで除幕式が挙げられ氏の努力とその徳をたたえたのだった。

ところが茲に思わぬ騒動が起った。この大工事が竣工するに伴い今迄芋粥を吸っていた農民は一日を争い我先に乾田を又荒畑を水田にかえ白米を鯨腹食べられるようになり在来米を止め蓬莱米づくりに専念し又砂糖原料の甘蔗畑も稲作となり為に製糖会社は原料不足のため経営が不可能になりかけ農民団体との間に確執が高まり大騒ぎとなった。当局や庁役人も収拾に手を焼き遂に八田氏に調停を頼みこんだ。氏は農民代表と膝

を交えて協議し所謂三年輪作を提案し遂にこの大騒ぎをとり静めたのは有名な話だ。これも如何に農民に信望があったかの証しである。即ち全区を三区に分ち第一区は砂糖甘蔗、第二区は稲、第三区は雜穀とし毎年交互に輪作することで全農民を納得させ製糖会社も承諾し、しかもその結果以前より何れも増収となり両者とも喜んだのであった。

かくて嘉南大平野は一面の豊饒な沃野となりこの地方は農業製糖製紙業を中心に一大発展を遂げたのだったが、図らずも昭和十一年日支間に戦火が起り日に日に拡大して遂に大東亜戦争に突入してしまった。

昭和十七年三月我が八田与一氏の身にも一大異変が起った。工務所長、勅任技師、嘉南大圳水利組合顧問とその時まで身の栄達を離れてこの嘉南の地に身も心も注ぎ込んでいた氏にも木綿作地開発のためフィリピン行きを命ぜられた。農民の涙と万歳の喚声に後髪を引かれながら上京し打合の上船で任地に向う途中、南支那海で米国の潜水艦のため乗船が撃沈され無念にも五月八日海の藻屑と消えてしまった。当時烏山頭ダム畔で留守を守っておられた外代樹夫人の愁傷は見るに忍びないものがあったという。

八田与一氏の銅像は昭和十九年の

金属回収で一旦高雄に運ばれたが運よく熔融を免れ終戦直後嘉南大圳関係者一同が台湾政府に懇願して嘉南農田水利会烏山頭管理处に安置された。戦後島内の日本人の銅像は、上は総督のものを初め全部廃棄処分されたが我が八田与一氏の銅像のみは今も烏山頭ダムの青い水面を見守って百万の農民に守られあがめられている。半世紀にわたる日本の統治の中で八田与一氏ほど台湾を愛し寄与した日本人は幾人あつたろうかと謝新發氏は書いている。

昭和二十年九月一日……この日は烏山頭ダム工事がスタートした二十五周年日に當った。この日奇しくも八田氏の次男が復員して帰って来た。その喜びを家族一同と共にした翌朝未明太陽がダムの水面に輝いた時、外代樹夫人は「みあとしたいわれもゆくなり云々」の遺書を残して与一氏の銅像わきの烏山頭ダムに和服姿に薄化粧されて身を投ぜられた。この悲報に嘉南百万の農民は勿論新聞で知った島民はあげて「慟哭してやまなかった」と著者は伝えている。御夫婦の墓は今も烏山頭ダム畔に眠っている。

八田与一氏の大工事の嘉南地区への恩恵は上述の農業開発に止まらなかった。烏山頭ダムの貯水池は珊瑚潭(台南県)といい 有名な日月潭

より広く雄大で其の絶景は台湾屈指で交通も便利なので昭和五十四年から觀光局と嘉南水利会が提携して開発建設がすめられ種々のレクリエーション設備が完成し大觀光地と変貌し今年年間九十万人を超す觀光客で賑い地方住民は莫大な觀光収入に恵まれるに至り八田氏の偉業は嘉南平野の発展と共にその輪を上げ氏に対する地方住民の感謝は其の銅像前のたえざる捧花にあらわれているという。

又著者は「大東亜戦八周年に戦場に狩り出された台湾人は十八万人：軍夫、農業義勇団、通訳、志願兵、徴兵……そのうち三万余は戦歿した人が経済大国を誇る日本人がそれらの人に報いたのはなんであつたろうか……恩給か？ 扶助料か？ いや梨のつてであつたのだ」と書いてある。台湾人の心境が我々の胸をえぐる。その著者が八田与一氏を民族の父と呼んでいる。改めて郷土、同窓の先輩八田与一氏の遺業の尊さを憶う。彼の生国日本政府からは勲章一つ貰えなかったが台湾島民は彼の銅像を贈り守っているのだ。

「一中十三年会」回顧

村山 勝次郎

(一中三十一回卒)

ある日、古い一葉の写真を探し出し出した。この一葉の記念集合写真とは、今から二十年昔の昭和三八・一〇・一二、母校創立七十周年記念祝賀式典挙行の当日であり、式典終了後吾々は「湯涌かなや」に集合、卒業四十周年記念の全国大会を卒業以来初めて催した際のものである。今は亡き恩師鏑木、松本両先生を迎え、卒業以来初めて顔を合わす旧友



も多く、出席三十三名、大広間での提灯行列に興じ、青春時代の思い出話に秋の夜をふかした楽しい一夜だった。二十年後の今日、この三十三名の出席者を物故者と生存者とに分すれば

物故者：瓜生順良、南浮二雄、安田徳治、竹谷政雄、岡重雄、押野谷外久治、笹木不二麿、前田義雄、松任参雄、岸勇、中西三郎、太田久雄、泉谷紀念、本郷博、白崎文雄、旗恒雄、以上十六名。

生存者：北村三郎、宮田千代松、格内四郎、天富直次、金平喜三、安井睦美、村山勝次郎、山科清栄、藤井巽、藤田秀一、岩田繁雄、高島弥生、梅田達明、清水俊雄、橋浦彦三、中島信吾、広瀬賢古以上十七名であり明暗をわかつもの相半ばす。なお、今日生存確認の同期生四十三名にして、我が同期の卒業時点での総数は一五六名(同窓会名簿による)であるから物故者七割、生存者三割となり、誠に淋しいことではあるが六十年の歳月のもたらしたものであり、高齢者の避け難い宿命でもある。次に開戦の直前の昭和十六年以降、最近迄の十三年会の主な会合を記録より摘記、その推移を見る。



前掲を二べつし、夫々がかつての桜章健児の誇りと気骨をもち、第二、第三の人生を経、今も母校を愛し、同窓を懐しみ相集う心情変りなきを窺い知る。吾々は更に今秋十月十四日には湯涌白雲楼を会場に、卒業六十周年記念大会を催し、翌十五日には母校創立九十周年祝賀式典に参加するもの二十二名に達することも満足すべき結果である。

実施月日	会場	出席人数	備考
昭和6・5・21	兼六園三芳庵	15人	室井捨二海軍中佐歓迎同期生、有志の集い
昭和35・7・17	金沢・金城楼	20人	
昭和50・10・14	山 錦 楼	20人	卒業50周年
昭和55・5・16	六甲山凌雲荘	19人	夫人3、計22名
昭和56・5・26	熱海・凌雲閣	19人	夫人3、計22名
昭和57・5・22	粟 津 法 師	22人	那谷寺にて物故者追善法要 夫人1、計23名
昭和58・6・9	熱海後楽園ホテル	19人	夫人4、計23名

九十年史のひとこま

— 八十年前の校友会会報から —

堀 毅

(一中三十一回卒)

一 泉九十年の歴史において、明治時代の一時期（M37年11月第6号校友会報）に懸賞作文の課題に「久田船長」が選ばれ、全校生徒に綴らせられた事実があります。旧一中の校長久田督先生の頃です。一体「久田船長」とは何であつたのか。元治元年十一月久田佐助は石川県鳳至郡能都町鶴川に生まれました。明治二十六年東京商船学校（現東京商船大学）を卒業するとたちちに日本郵船株式会社に入社。東洋や北米の航路の各船に乗り組みました。

明治三十六年、久田佐助は「東海丸」の船長として青函連絡船に乗務し、濃霧と吹雪のなかを運航し目的地函館を距る約十五海里の矢越岬沖に差ししかつたときでした。室蘭から石炭を積んでウラジオストクへ帰るロシア船プログレス号のために

T字型に舷側を破られました。乗客船員悉くボートに避難させましたが、海上模様が悪く、夜明前の暗闇のため、五隻のボートのうち四隻が波浪と渦流に捲き込まれて転覆し、一隻だけ辛うじてロシア船に救助されるという有様（ロシア船は船首を毀損）

でした。このとき久田船長は、突嗟の椿事にたじろがず部下の指揮督励と乗客への助言誘導に懸命、脱出の成功を期したが、海潮が一時に船内に浸入して愛船は刻一刻と傾きかけます。沈没必至と見て取つた船長は、相手船ブ号に危急を知らせた救助を要請すること、今ひとつ左程遠くない陸上からの救援を求めるために、唯ひとつの術策として警笛の吹奏にすべてを賭けました。暁の音響をとどけるべく己が身をマストに括りつけ、生命の最後の瞬間まで汽笛を鳴らし続けました。

この間移乗を勧めたボーイの喚声を退け、また救命艇で助けに來た露船員達の来迎も謝して受けませんでした。決意の程を知つたロシアの船員達も東海丸と共に唯一人沈む船長を涙声（なみだごえ）で見送るばかりでした。

こうして助かつた人達は百四名中五十七名。旧小学校国語読本五年生用教科書には「四十歳を一期として従容死についた船長久田佐助の高潔な心事は忽ち世に伝へられ、日本人々々をして涙をしぼらせた」と書かれました。明治三十六年十一月某日信州善光寺の僧職正智坊氏は、故久田船長遺族宛の慰問状に「此度の御遭難に際し御職務とは申しながら充分御助命遊ばさるべき時間もある

候由唯船長として幾多の人命を御救い給へと其責任を尽され候事其御決心の程何とも申上様もなき有様日本全国の人民一同感慨の至りに存候云々」と述べました。旧文部省の執筆者がこの書簡を見て居られないのに双方の文勢が符号しているのは驚きです。

石川県・北海道・東京で各地異なつた作詞作曲の唱歌が生まれ「久田船長」・「東海丸」・「東海丸の船長」のタイトルで愛唱されました。当時の著名雑誌「中学世界」に明治の文人大町桂月が「職に殉じたる船長」と題して一文を載せ「嗚呼大和魂は

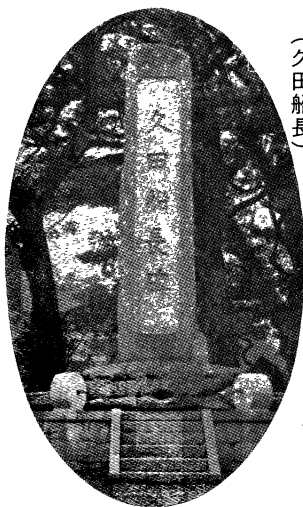


(久田船長)

なほ未だ懲滅せざるなり」と筆陣を張りました。

往時の故久田船長弔慰会（石川県官民有志代表十五氏が發起）の發起者に久田督校長も芳名を連ねて居られます。同時代の教諭陣には、渡辺盛太郎、辻 甫、橋船次郎、安田太作、安田松太郎、藤井準夫の諸先生が居られ懐かしい限りです。「久田船長」という名文を遺された方々は、五年級崎浦庄太郎、同和田法雷、四年級山田毅一、三年級坂井正一、一年級藤村宣の五名であります。明治は遠くなりました。明治生れの私は、激動の時代を過して來ましたが、価値感が多様化し指針が見つけない時代だけに、一中の先輩各位が残された名文に触れて一つの永遠を見出したようです。

なお八十年前の校友会会報は、先年郷土史家山森青硯先生が「泉丘高校善本解題目録」作成の為登校調査の折、同校書庫に永年眠り続けていたのを発見されたものです。



恩師・吉野勝太郎先生

富沢友治

(一中三十二回卒)

愛称「デモ」。私はこの先生から、剣道を通して、人間としての生き方と、歴史と伝統を尊重する、愛校精神というものを教えられました。

先生は、大正十年京都の「武専」

を出て、直ぐ、母校の金沢一中の剣道教師として、ご赴任になり、終戦後の学制改革まで二十六年間、母校で勤務されました。私たちは、先生が母校のために、生涯を捧げられることが、ご自身の生きがいであり、本懐であるように、お見受けしてました。この間、剣道部員はもとより、全校生徒が先生の訓化を受け、等しく敬仰し信頼するところでした。

歴代校長の更迭、時代の変遷、国の消長、教育界の移り変わりなどありましたが、先生の教育者としての節操ある態度、母校愛からほとばしる責任感と、直情径行の行動は、至誠一貫していました。いづどこで先生と逢っても、先生の変わらぬ風貌の底に、先輩から受け継がれた、一中スピリットを感じました。こうした先生の気高い人柄と、日常生活行動を、誰よりもよく知り、信頼し尊敬していたのが、かつて、武徳殿での全国大会で優勝したときの、剣道

部マネージャーとして、直接先生の教えを受け、宮内庁次官を最後に退官された、故・瓜生順良氏でした。

先生が一中教諭から、モデル校としての新設組合立森本中学校長、引き続き、川北中学校長、浅野川中学校長を経て、現職を退かれたとき、いち早く、先生を東京の石川県学生寮の責任者として、荏原製作所社長畠山一清氏をはじめ、要人に推薦されたのが瓜生氏でした。昭和三十三年以来、寮長として十八年余、在京石川県学生の育英に、最後の心魂を傾けられました。そして、新装成った学生会館の基盤と、健全な寮風を確立し、その運営を軌道にのせ、後任者を見とどけて、齢八十二歳で、五十二年七月末退任されたのでした。

この間、私は先生の初弟子の教え子の一人として、旧制中学時代はもとより、先生の最期の日まで、親しく交わらせていただきました。先生によって培われた、先生の全人格―体を通しての「義に勇んで徳に果つ」の剣道精神は、いつまでも私の心の糧として、生涯のバックボーンとなっていることを感謝しています。

先生が寮長の晩年、奥様（木村清松先生「物理」娘）に先立たれたことは、先生の生涯における最も悲痛の極みとしての不祥事でした。いつまでも意気盛んな先生のご令室とし



(故 吉野勝太郎先生)

に校舎移転の際は、その中枢として、その後、泉丘高校が旧一中の精神を継承し、名実ともに世の信頼と、確固たる基盤をつくり上げるまでの転換期においても、学外にあって、同窓会の立場から支援された、母校愛も見逃してはなりません。

先生の薫陶を受けた多くの人材が、今日、それぞれ社会的に活躍し、先生をいつまでも敬慕していることを聞くにつけ、先生の生涯は、全く「剣の道人の道」で、教育者として真実に生き、誠実にして高潔、無私の人であつたというべきでしょう。母校創立九十周年を迎え、ありし日の颯爽たる師の面影を偲び、懐古の情を新たにしています。

(一九八四・三・五記)

本多町の運動場跡

吉田直茂

(一中三十二回卒)

大正九年春、私が入学した金沢一中は、本多の森を背にして、現在の社会福祉会館・教育センター一帯に校舎があり、道一つ隔てて観光会館の所に運動場があつた。ここで運動会や野球試合などが行われ、軍事教練でしごかれもした。

二年生の頃か或る冬の日、活動写

真のロケーションがあり、日活の大スター目玉の松ちゃんこと尾上松之助が、忠臣蔵の赤垣源蔵に扮し、一升徳利を下げた合羽姿で、ノシノシと雪の運動場を歩くシーンがあり、生徒は物珍らしさに授業の休憩時は、運動場に殺到した。松之助が意外や小男であったこと、ドローランで化粧した青い顎などを、今でも鮮明に記憶している。

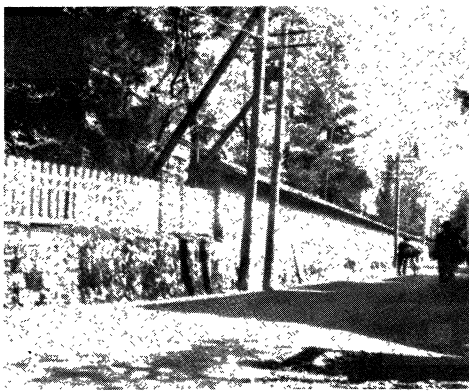
何年生の頃か定かでないが、運動場の北側に県庁の官舎群が一並び建てられ、それだけ運動場が狭くなったので、我々生徒は大いに憤慨したものだ。野球試合は北西隅を本塁として行われたので、ファウルフライがバックネットを越えて官舎内に飛び込み、硝子戸や屋根瓦を毀すことが屢々あった。その都度、応援の生徒達はワッットと喊声をあげて僅かに鬱憤をはらしたものだ。

それから幾星霜、紅顔の少年から熟年のオッサンになった私は、昭和三十年秋、図らずも転任で石川県庁に奉職し、この公舎群の一つに居住する身となった。丁度今の石亭の向いで、中央公民館のある所であった。金沢一中はとうの昔、山科に移って泉丘高校となり、運動場跡は婦人会館が建ち、また市の瓦斯水道の資材置場となっていた。私の住んだ公舎は敷地も建坪も広く、居住環境は抜

群で、我が生涯最良の生活に恵まれて、五年半を此処で過ごさせてもらった。この間、長男、長女、次男が相次で泉丘に入学したので、我が一家



(運動場跡地を臨む)



(学校正門横の道路)

は同窓四人となった次第だ。

運動場跡に市の観光会館建設が決まされ、公舎群は市有地の寺町桜木病院跡へ移転したのは三十六年春であった。その秋、多年の公務員生活を退いた私は、横浜に転任し建設業界で第二の人生を歩んだが、古稀も近付いた昭和五十年春に再び故郷金沢に戻って、鈴見の高台に居を構え余生を送ることとなった。

金沢市教育委員会の老人教育の一

つとして、高砂中学校、同大学院な

る講座があることを知り、これを受けて名士の講演を聴き、学習を積んで修了の上は、続いて俳句や花樹の同好会に参加しているが、これらは総て中央公民館が教室であるので、奇しくもかつて住んだ公舎跡で学習できる因縁を思い、また金沢一中時代を想起して無量の感慨に耽るのである。

(五九・二・一八記)

桜美会のお知らせ

I 総会決定事項(二月五日開催)

- 1、泉が丘卒業生より副幹事長 高桑重三氏静養のため辞任し、織田幸子氏が新たに選ばれました。
- 2、母校90周年記念として桜美会名簿を作ります。
- 3、第12回桜美会展

10月10日を含む一週間の予定です。尚作品の大きさは自由とします。

II 春の一泊写生会

日時・場所

6月9・10日 獅子吼方面
宿 舎

鶴来町八幡町72 かのや
☎(076119)2-0645

会 費 六、〇〇〇円

集合・出発

画材かなざわ前 午後2時

III 第8回桜美会小品展

日時

7月12日(木)～7月17日(火)

場所

金沢市片町 北陸電力SS

規格等 絵画 書 工芸 写真

6号程度の大きさ

費用 三、〇〇〇円

搬入

7月12日前9:30～10:30

搬出

7月17日午後4:00～5:00

但し、画材かなざわに委託される場合は前日迄

大河寥寥氏を悼む

山 森 青 硯

(一中三十三回卒)

大河寥寥(良一)さんが昭和59・1・15御他界された。享年八十二歳。希袋、寥寥は其号である。氏は一中第二十六回卒(大正八年)であった。俳人としての彼は余りにも有名であった。先生の御一生を顧みると、寔に波瀾曲折に富んでいたと云いたい。

其職歴が示す如く、昭和23年金沢一高校長、同年11月教育長、其後県経済部長、繊維会館、金沢市助役と教育、語学、実業、俳諧と多岐多端に涉った。最も一泉と御関係あることは前記・金沢一高校長、石川県教育長であった。

就中、終戦後の旧制中学校統廃合問題であった。マッカーサーの来日は、旧軍国制封建を真正面から抹殺することであった。我が一泉は嚴霜碑建碑を開校記念日としている。此の様な旧制校は他に類例を見ないであろう。県教育御当局はどうしたのか、封建の極致校、一中を残し、新進気鋭の二中を抹殺された(20年8月二中の御真影を一中に奉迎)狂瀾を既倒にかえしたと云えよう。筆者此の問題の跡かたづけに就いて、

大河先生一方ならぬ御骨折を承ったことが在った。昭和47・12・28筆者茶島一ノ小路52御宅をお訪ねしたのが最後となった。

それは先生の処女作「芭蕉翁雑考」に御署名を願ったからである。御署名は心よくいただけたが、何となく寥しいお顔であった。先生曰く、此の発刊店は東京資文堂である。

昔此の店が勝手にどれだけか(先生の印無きものを印刷発売)を発売刊売っていたので、それかと思っ

たが、本冊は本物であった。と。筆者架蔵「華影集」をとり出し、寥寥氏御自筆

にきりしめた。すながこぼれてゆくやうな このさひしきさの たへかたさかな

良一

をお見せした。見るなり「ヤア」と云われたとき、じっと目を瞑られ、自歌に目を通さず、未央、砂丘の句を凝視された。(先生学生時代から北声会に加入された)大西辛酉(十一年)五十年前にもなされた前記和歌一首と今日と少しも変らぬ先生の淋しさをよみとれた。

按うに先生一中・四高・東大・四高教授と世に最もエリートコースを経、郷土俳諧史の晩星「加能俳諧史」の著、世に最も難関とした凡兆の解明等、枚挙に暇なし。然かも御長男千弘氏(昭和20年一中卒)は、核融

合の世界的権威者、米國一分間も手離し出来ない彼國の至宝である。以上どれ一つとっても江湖は羨望的であった。

お住いは瀟酒を門構えであり、此処を終生動かぬと云って居られた先生が、最近飄然と東都へ転居された。何年前か二水高校が穴水町から移転の話が持上った時、筆者(穴水町住)遺留懇請に、教育長室を訪うたことがあった。先生曰く

貴公はどうして遺留を乞うと。町民は野球で雨戸の硝子が破れる。早く移して欲しいとの懇願が毎日である。

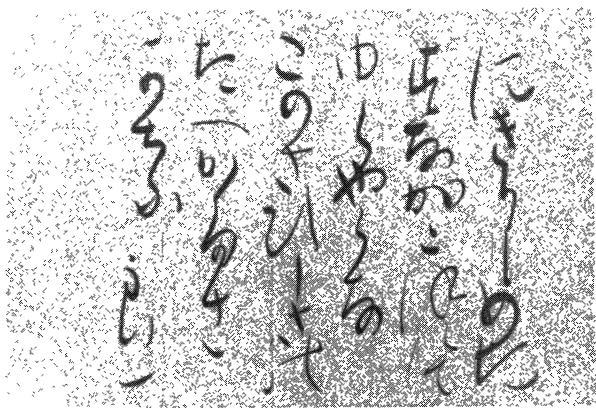
と。余は孟母三遷の教等を申し上げたが、駒井静子さん自郷を学都としたしとの望みにて、とうとうと行って行かれた。其時大河先生始めて抱負を申された。

現時の高校敷地(五〇〇〇坪)としては狹隘である。野球をする運動場があるから)女子のみの高校ならば、四階建て充分である。現時男女共学で、女子のみ校は全国私立校のみである。自分は官立女子校を全国で一校だけ設立して見たい。

と漏らされた。畏友殿田有竹堂氏仲に入り「加能俳諧史」の増補版を企画されたが、此れも不調に終ったと聞いた。

嗚呼洛陽の紙價は駄作で高い。先生の稀観書は依然として光を放っている。先生曰く本書は畏友大鋸彦太郎資料に依って成ったと。

先きに俳史家竹谷政雄氏(大正13年一中卒)逝き、今又一泉の至宝大河寥寥先生逝かる。筆者浅学菲才、駄文を弄し心から先生の御逝去を悼むものである。



五十六年目の感懷

大森玄衆

(一中三十五回卒)

昔は人生五〇年といわれたが、もう七〇の古稀をとくに通り越した今、同窓の連中はどうしているだろうか。

昨年五月の総会で調べたところ、昭和三年、厳霜碑前でいっしょに卒業写真を撮った当時の四クラス一七〇名あまりが、半数の八〇名しか生きていない。この八〇名の中、自力で動き廻っている者がその又半数の四〇名で、残りの半数は病床にあるか、一人では動き難い状態であることが分かり、うたた淋しさを感ずる。釈尊は「生老病死」の四苦の人間界の実相を見きわめよと四諦の真理を説かれたが、この年になって臍氣ながらそのことが分かってくるようだ。早い時の流れの中で消え残った生命の灯を大事にともし、その灯がつきた時「はい、さよなら」と手をふって桶の中に入りたいものと思う。

振りかえってみれば母校一中は幾多の思い出を作ってくれた。本多の森をバックにした古い木造の校舎は今とはあとかたもなく、自分らの脳裡にしか残っていないが、この校舎で育った多くの人材が明治・大正・昭

和の三代にわたり戦争の渦に巻き込まれ、戦後の混乱を泳いで郷土を守り、日本を築きあげてきたことを思うと今は幻の建物にも一人愛着を覚える。

卒業生の中、現存者の最高は何回の方だろうか？先日一泉同窓会事務局の西多さんに聞いてみたら、今わかつていところでは明治四〇年卒第十四回の方だと答。自分らが三十五回だからもう九〇何歳になられる大先輩なのに驚く。(因にこの方は現在、札幌で書店を経営しておられる近藤啓志さんとか)

泉丘の新校舎はすばらしい近代的な姿で出来あがった。鉄筋のりっぱな建物に見えながら、この校舎が旧の校舎に負けぬよう有為な人材をドシドシ育ててくれよと念ずる者の一人である。

随想

安原二郎

(一中三十八回卒)

私の中学時代、少年から青年への大過渡期、大正十五年入学、昭和六年卒業、多感な五年間を本多の森の古い汚い明治臭の残った校舎で過した。

入学一九四名、卒業一八一名、その内戦死を含めて半数の九〇名は既に他界し半数が生き残り、内二十数名は毎年どこかに集って同期の六桜会を開き、何時迄続くか知らないがお互に元気に且つ飲み且つ語り談論風発、中学時代の若さとその後の長い経験で得た知識とが入り混って時のたつのも忘れてしまう。私にとって大きな楽しみの一つである。そしてあたかも走馬燈の如く、色々な事が我が脳裡に閃いてくる。

今想うとやはり大きな人生変革、人格形成の時代であった。学科もテキストも盛沢山あり、どれも之も皆新しい珍らしい物許りで手当たり次第に知識を吸収した。又教師の数も多く、皆それぞれに特徴があり全部ニツクネームがついていた。入学後まもなく応援歌の練習があり、金石の角力大会に金沢市設グラウンドの陸上競技に大声でわめいたが、此の頃の歌の曲は皆旧制高校、特に地元四高や一高の有名歌の曲をつくりであつて、勇壮で幼い私の魂を鼓舞してくれた。これは四高時代と共に、長く私の長い人生を元気づけて力と勇氣



追憶

山田 栄喜知

(一中三十八回卒)

スプリング、ハズ、カムに始まった英語は、小学校にはない科目で少々緊張して授業を受けた記憶がある。先生は小原先生で仇名は「むじな」だった。生真面目な人で授業一途という感じだった。後年私の娘が泉丘高校に入って職業指導を受けた先生が小原先生の息子さんだと聞いて何か因縁めいたものを感じている。息子さんも既に退職され昨五十八年十一月に亡くなられたと聞きます。

その頃は学業の成績により毎年教室と席順が変更された。二年生の時だと思いが組長の隣の席に坐らされたことがある。組長H君と副組長I君は共に海兵志願だった。H君は秀才タイプで受験勉強は家ででもするのが学校でするのをあまり見かけなかった。教科書の欄外に書くメモの文字が誠に綺麗でひそかに真似したものだった。副組長の席は一番前の角だった。I君は努力型で寸暇を惜しんで勉強し授業中も教科書の屏風の陰で参考書に読み耽った。大抵の先生は見逃したが、中には注意のつもりで質問を発する先生も居た。彼は悪びれもせず横の友に質問内容を確認して堂々と返答していた。この両君はその年にめでたくパスして姿を消した。やがて日支事変が勃発するやH君は飛行将校として上海上空で壮烈な戦死を遂げ、I君も大東亜戦争に発展してから軍艦と運命を共にし今はない。

新入生の頭に先ずたたき込まれるのは校歌と応援歌だ。雨の日なら雨天体操場で、晴なら角力場のある庭で、元気のよい五年生のリーダー数人の打振る旗に合せて歌わされた。その面前で角力選手は堂々と素裸になりまわしを着ける。選手はすっかり大人と云う感じでその度胸のよさを眩い気持で眺めたものである。その中の一人は今も犀川上流の町で料亭旅館を営営して居られると聞く。



(安田エボニ先生)

妙慶寺さん

永井 正三

(一中三十八回卒)

犀川大橋から寺町の方へ斜めにある蛤坂に、安養山妙慶寺という浄土宗の古刹がある。

現在の内田隆元師とは一中で同期である。同窓に僧職がいると物故者の追悼会などにも好都合で、昔、級友から「トツチ」と呼ばれて根っから気の好い、ボーッとした少年だった隆元君が、近來ますます先代に似てきた重厚さで、サビの利いたお経を上げてくれると、さすがは五十年の年期、有難味も違うというものである。

この寺がひと頃、一中の寄宿舎になったというのを、このほど『七十年史』をみて初めて知った。一中の草創期、校舎がまだ駅近くの新道にあった明治二十九年(一八九六年)七尾分校が廃されたことなどあって、郡部の生徒がドッと金沢に出てきた時である。

寄宿舎が本多町に落着くまでの一年余りだが、約三十人の生徒が本堂の両脇に急造した五、六室、座敷を間仕切した三、四室に合宿した。食事はお寺の賄いで一日十銭ぐらいだったという。



茶谷保三郎氏(7回卒・オリンピック光学・田熊汽缶社長)の追憶によると、『毎朝、暁方から小僧が大声で上げるお経、木魚、銅鉢の音に起こされてしまい、憎らしいたらなかつたが後では平気になった。冬は隙間から雪が吹込んで布団が白くなっていた』とある。舎監は紋服で朝晩漢詩をうなり、元藩士?の寮務のオッサンには剣道でしごかれたというから、その雰囲気も想像がつく。何しろ日清戦争が済んだばかりである。それから七、八年あとに日露戦争、今度はこの寺、ロシア軍捕虜の収容所になったのだから和尚さんも忙し

い。旅順・奉天で手を上げた露軍の捕虜で、日本へ来たのは約七万人だが、その内六千が金沢に來た。置く処が無くて石川門、公園内の勸業博物館、出羽町、野村練兵場で足らず、両別院や天徳院、妙慶寺などにも押付けてきた次第。早朝のお経には彼等もびっくりしたに違いない。娘さんらがこわいもの見たさで覗きにいくと、赤ヒゲの顔、顔、顔が、「ねえちゃんッ、ねえちゃんッ」と大声を挙げたという。随分好遇され、下駄やハッピをお土産に帰っていったが、戦傷の後遺などで十一人の兵が亡くなり野田山に葬られている。

一つの寺にも時代、時代を物語るエピソードやロマンがあるものだ、と思う。金沢にはお寺が二百四十ほどある。

金沢一中創立九〇周年記念

七桜会全国大会のおしらせ

山 瀬 芳 男

(一中三十九回卒)

まいどさん

七桜会のンなさん息災でおいでるけ？今年じゃ大雪で尾山の方は大変やったけれど、今じゃよい気候になりみした。

今年しゃ一中創立九〇周年やとい

ね。わし等も卒業してから、はや五十三年目になったがいね。早いもんやね。何やらやくちやもない変り目の中で、むたむたしとる間にもう古稀をむかえるようになったがいね。もうヂーちゃんやろ、生き永らえて幸せやな。ほやけど、先きにいった七十三学友を思うと、何やら淋しいなあ。心から冥福を祈ろうや。こないだから、金沢における世話人で一中の記念式に合わいて、わしら七桜会の全国大会をやろうと話したたら、次のようにやるがに決まったがや。沢山集って、バカ中や、ポンプ、イナシヤ、トツカピン、ガンマ、パンジュ、チョイトコ……そしてニキビ時代を想い出いて、一晩ゆつくり話して青春を回想しまいか。尾山にや、どじょうのかばやき、越山の焼まん、ジロアメ、円八のアンコロもあるぞ。

ンなさん、たと集ってくれや、待つとるぞ。

ほんなら、ヤマイにならんように、そして自動車がたと走つとるさかい、カイドが危ないぞ。よう気つけまっし。

ウチカカの ンなさんに おゆるつしゆ。

ほんなら さいなら、さいなら、さいなら……

へんじ まつとるぞ

記

一、集合日時 昭和五十九年十月十四日(日)午後二時

一、集合場所 金沢市本多町観光会館入口(旧一中運動場跡)

バス・準備する。

一、宿 泊 栗津温泉ホテル「雲井」

一、十月十五日(月) バスで栗津「雲井」出発。

秋の那谷寺を詣で、泉丘高校九〇周年記念式場へ(式典十二時三〇分—十四時三〇分)(流れ解散)

一、十月十五日 午後五時三〇分、九〇周年記念祝賀会

南町(尾山神社向い)金沢ニューグランドホテル

会費 五、〇〇〇円
(希望者参加されし)

親爺を懷う

英 勝 雄

(一中四十一回卒)

今年は一泉同窓会開校九十周年の年である。記念事業の寄附金の事で事務局の西多先輩へ電話したら、熱っぽく是非親爺さんの事を「一泉」

会誌に寄稿して欲しいと云われ、小生として、とつさに七十周年記念の時、同窓会から永年(五十年)に渡

って同窓会につくした印に「大先輩親爺の大好きだっ

た木村珪二氏に依頼された

スバラシイ、

ブロンズの胸



(故 英 安 吉 氏)

像を戴いた時の嬉しそうな顔を想い浮べました。

昭和三十年二月、かねてから旧金沢一中と泉丘高校の両同窓会の合併を熱望する声が高まって来た時、両者の仲に入って合同同窓会の結成に奔走し新しく一泉同窓会として発足させたと聞きます。

以来、この初代会長に推され昭和四十三年八月病没の日迄これが続けました。本当に親爺は良く同窓会、母校には足繁く出向きましたし、関東、関西一泉同窓会の生みの親でもありました。

事ある毎に「一中スピリット」が口癖でした。香林坊の高台では一番古い店とはいえ、しがない薬屋とカメラ商。店の者は二、三人、商売をほつたらかして人様のお世話が出来たのも、美しい継母二人の糟糠の妻に恵まれたお蔭だったと小生は何時も思つて居りました。

ブロンズの胸像は大切に香林坊二階の応接間に飾つてありますが、今度の香林坊再開発で先ず旧四高辰巳用水上の飯店舗の二階に置き、三年後には、香林坊第二街区ビルの新店舗の店に飾りたく思つて居ります。

親父 安吉 明治44年第18回卒

小生 勝雄 昭和9年第41回卒

息子 健一 昭和38年泉15回卒

孫 男子三人、なんとか泉丘へ

伝統ということ

―名簿調査に寄せて―

平 石 英 雄

(一中四十一回卒)

昭和五十八年十月に発刊された一泉同窓会の名簿の作製に關して、私は主に明治期及大正初期に卒業された先輩の方々の内、特に不詳となっていた約五百名の方々の把握をする為に、去る五十三年から約五年間自分なりに努力を傾けて参りました。

この間、私など足元へも近づけない様な立派な先輩に親しくお近づきする事に恵まれ、戴いたお手紙やお話から実に大きな感銘と示唆を受けました。亡くなられた多くの方々を含め、何と立派な先輩が多かった事か！

然し乍らそれ等の方々の内九十幾歳の天寿を保たれ、一泉同窓会の至宝とも称すべき数人の方は、ここ二、三年の間相ついで幽冥を異にされました。即ち、九十九歳の茶谷保三郎氏(七回)を初め、清水与七郎氏(九回)、吉田一郎氏(十回)、藤秀環氏(十一回)、笠森周護氏、渡辺鼎氏(十五回)等であります。

誠に惜しみて余りあり、深く哀悼の意を表します。

私は、前記の資料調査をつづけている間に実は二つの事を深く感じま

した。

一つは、伝統という事であります。どの学校にも夫々校風を造りあげた伝統といわれているものがあるに違いないと思いますが、それは一体何だろうと思ひました。一中に關していえば、それは明治三十二年五月に第二代の野田藤馬校長時代に成文化された「校訓七則」がその極めて重要な淵源ではあるまいか。そして校訓を懸命に又謙虚に実践された多くの先輩の方々の生き様と努力が母校に染

色体的に形成され伝統となつて創りあげられたものではなからうか。現代にも立派に生かして欲しい金言玉語が校訓の中には数々あり、教師生徒を問はず模索をつづけている現代の教育に生かされないものかとつくづく思います。せめて母校に於てこの校訓を再認識して伝統ある校風の再確立に資せないものだろうかと思ひます。

その為には私は一つの提言があります。母校の伝統の生き証人とも申すべき至宝の様子が九十歳近い長命で幾方が現存されておられます。九十周年という二度と廻り来ない節目に、何とかこれ等の方々をお招きしてたとえ十分でも十五分でも後輩への貴重な指針となるお話をお願いしては如何と思ひます。

最近私は、この方々の幾人かから

幾篇かの文書を頂戴しており、文字通り校章校の師表とも仰ぐ方々だと改めてその感を深くしたのであります。

次に申しあげたい事は、名簿から不詳という文字を出来るだけ少くする努力がどれだけなされているかという事であります。

私が考えますのに不詳になられた方々には大別して次の三つの理由がある様に思ひます。

第一は、病弱、不遇の為次第に同期や母校と疎遠になつて行つた方々。

第二は、何かの機会に途切れた為以後の接触を不能にした方々。

第三は、自らの意志で不詳を求めた方々。然しこのケースは極めて稀でした。

五年間の私の経験から第一、第二の場合について消息が判つた場合には例外なく大変感謝され喜ばれ、よく捜して連絡してくれたとお礼を仰言やる事が殆どでした。そして、あれはどうしている、彼は達者かと突然魚が水を求める様にして同期や友人の消息を尋ねられるのでした。

名簿の編纂過程に於て最も意義と喜びを痛感する瞬間ではあるまいかと思ひます。

この様な事の積み重ねが同窓会存在の原点であり本義ではないかと思ひにつけ、同窓会の本當の基本的仕

事は何をなすべきやの答は自然に出て来る筈です。総会やパーティーも夫々にセレモニ-的な花火としては意味があるでしょうが、同窓会活動の真意は名簿の整備という不断的接触でよりよい充実した名簿を作る為の積み重ねを瞬時も怠つてはならないと思ひますが如何でしょうか。

金沢一中の想ひ出

梶 川 欽一郎

(一中四十二回卒)

今年は泉丘高校創立九十周年ということであるが、私達の年代の同窓生(四十二期、昭和十年卒)にとつては、本多町の旧金沢一中が想ひ出の母校である。もう五十年近い昔のことである。その記憶は断片的であるが、校門横の嚴霜碑、薄暗い雨天体操場の桜などが思い出される。それらは総て現在のモダンな泉丘高校とは全く違つた古めかしいたたずまいであったが、「本多の森にひとと咲ける桜」として伝統と誇りに満ちた学校であつた。

先生にも風格のある方が多かつた。そしてそれぞれの先生に仇名がついていた。中にはその由来がよく分らないものもあつたが、意味は不明で

気楽な船旅

西村 忠 恭

(一中四十二回卒)

も何となくその先生にびつたりしていた。今でもそのあだ名を云うと、先生の顔つきや話し方まで彷彿として眼に浮ぶのである。すでに亡くなられた先生も少なくないが、斎藤先生、藤田先生、宮沢先生、後藤先生には我々の同期生会(十桜会)でお目にかかる。先生方にお会いすると私達はすっかり昔の少年に返るのである。

ここ数年間にソ連客船バイカルおよびジェルジンスキの横浜―香港巡航三回、アメリカンプレジデントラインのコンテナ船で横浜―シアトルの船旅を楽しみました。

当時の金沢一中は時代の流れで軍国調が濃くなっていたように思われる。軍事教練は勿論、ゲートル着用、挙手の礼、昼食前の校訓の唱和など今の学生諸君には想像もつかないことが行われていた。そんな中であつて、卒業間近に級友の翠田君が「クロイツェルソナタ」と「桜の園」の文庫本をわざわざ私の自宅に届けてくれたことが妙に記憶に残っている。

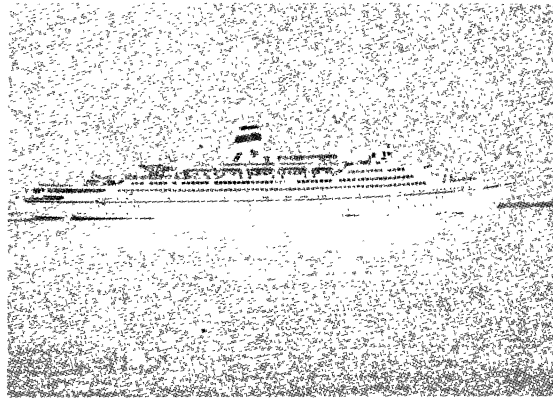
私達はもはや将来の夢を語るよりも昔の思い出を楽しむ年になってしまった。泉丘高校の新校舎の建築を級友の中側君が請け負い、富田校長の胸像が同じく級友の堀君の手で復元された。金沢一中と泉丘高校の思い出の絆として、我々同期生にとって特にうれしいことである。

船内設備は二百人用食堂、三百人は入るポリショイラウンジ(毎晩音楽会とダンスあり)、映画劇場、プール、体操場、バーが五つもあり、船客は誰でも等級差別なしに利用できます。服装は気軽に私は大抵Tシャツとゴムぞうりで食堂へも行きました。八階の間を二台のエレベーターが上下しています。

朝夕食とも毎日変わるメニューから好きなものを選ぶことができるし、朝七時と午後四時に紅茶とケーキ、十一時と十二時には夜食が用意されていてこれらはみな無料です。これだけでも日本では二万円位はかかるのではないでしょう。

毎日常事の手定表が船室に配られますが、例えば次のような催しがあります。古本交換会、体操やヨガや水泳のレッスン、トラップ射撃、ダーツやデッキテニス競技、ダンス教室、ブリッジやビンゴやカジノ等々です。

乗務員は三百二十一人で、すべてソ連人ですが英語を話せる美人達や



日本語の上手なパーサーもいます。この航海では船客は約四百人で半数はイギリスからで他にドイツ、アメリカ、イタリー、ギリシア、オーストラリア等々多彩ですが、日本人は我々二名だけでした。何故もつと日本人が乗らないのかと何人からも云われました。

来春もこの船が日本に廻ってくる予定だそうで、今夏までにはその航海日程が決まるとのことです。関心のある方は小生あて御連絡下さい。

〒251 藤沢市辻堂東海岸一の十一の五
☎ 0466・3617318

立春

新木 志乃ぶ

(通信十八回卒)

命名の墨の字ひかる寒日和
北風や村の灯見ゆる遠くより
玄関の鉢物の雪はらひゆり
一白は蓬入れし寒の餅
朝食に半熟卵春立ちぬ

母校を誇りに思う

山崎 太喜男

(一中四十二回卒)

一昨年の十月、山中で行われた十桜会総会に出席するため、期友駒居三郎君の車で母校の前を通った。広大な敷地と素晴らしい環境に恵まれたこの母校は、いまでも随一の名門校だという。

全国各地を転動したあと埼玉県の現住所に落ちついた私は、母校を訪れることも、期会に出席する機会にも恵まれなかった。ところが、期会「十桜会」の幹事だった辻永徳君は、どこから聞きだしたのか私のところへ電話をかけ、関東十桜会への出席を促した。

関東十桜会は、古沢英雄代表、久保田全俊幹事の骨折りではしばしば開催されているが、ある日古沢代表が出席した期友に感想を求めたところ、多くの期友が口にしたのは母校の誇りであった。

いま埼玉を含めて東京周辺では、人口の急増に対応すべく数多くの中学、高校が新設されつつある。その中には、生徒の受け入れを急ぐため、プレハブ校舎だけでとりあえず開校し、授業を進めると並行して校舎を建設するものもある。それはわれ

われの理解を超えるものであるが、ここでは現実にはそうした事態が起こっているのである。

こうした学校の卒業生たちは、母校に対してどのような感想を持つだろうか。

さて、われわれの母校は創立九十年記念を迎える。長い歴史と多くの優れた先輩を持つこの母校に対し、われわれは大きな誇りを持つとともに、今後さらに発展することを祈ってやまないのである。

吾人生の中の一

高辻 秀時

(一中四十三回卒)



吾人生の中で金沢一中生時代最も強烈な印象を刻する追憶抄である。

昭和六年春、小学校六年生の私が父の反対を押切つて一中を受験し入学した時に始まる。

帽子の桜章が輝き、手首の緑色の線が若葉を思わせ、奇異に感じたゲートル姿に愈々一中生としての自覚と感激と誇りに満ち満ち胸を張って校門を潜つたものである。

一年一組担任の坂木忠定先生の開口一番「ワシも一中の卒業生や、お前達は金沢一中をどうして受験したか」「伝統ある一中へ入学したかったから」の生徒の答に「よし天下の一中へ入学したからは先ず誇りを持って、然して校風の質実剛健を胆に銘じ全ての点で一中生として恥かしからぬ様、今日からビシビシ教育する」は十二歳の少年達も些かピリッとした驚いたものである。

然し先生は実に穩健で親切な先生であつたが、惜しむらくは七年前前に他界されたと聞く。

小学生の頃より剣道に憧れた私は一年生の寒稽古納会後上級生に入部を勧められた。

伝統ある一中剣道部で大好きな剣道が出来る、まさか、自分の耳を疑つた。髭の濃い恐い顔の上級生である。即座に入部の返事をした。

父より恐い吉野先生の下、自分乍ら毎日熱心に稽古をした。将来剣道大会に選手として出場するには新人部員二十名程の中から五人だ。必然的に熱心にならざるを得ない。

冬の金沢は暮れるに早い。本多原頭に宵闇迫る頃疲れて下校したものである。その間優勝し、優勝を逸し数々の大会で悲喜交々の思い出は多い。

最も印象深いのは四年生の時、全国中等学校剣道大会石川予選で難敵石川師範を降し、北陸予選で富山神通中学、福井中学を屠り東京での全国大会へ勇躍駒を進めた頃である。先輩各位の寄贈になる新調の防具をつけ、夏休み返上で早朝より夜遅く一日五回も食事を摂って稽古に励んだ。青春の一頁である。

三年生の初夏、当時としては将に驚天動地の生徒によるストライキが起つた。

我々は上級生の指示通り行動し、学校側から三年生全員に一週間の謹慎を命ぜられた。父母の驚きは言を俟たない。その「謹慎を命ず」と書いた印刷物は今も保管している。

これは現今言われている思想的に云々とか過激な運動ではなく、まさしく若く純粹な熱血と正義感がしからしめたもので、当時指導した上級生数名の勇氣には今更乍ら改めて脱帽する。時を経ずして伊藤允美校長に代つて七尾中学より青地乙治校長を迎え、いやが上にも清新な一中が此の頃より形造られて行つた。

恩師とは生ある限り切なる事の出来ない絆である。先年他界された鍋本勢岐先生には三年生の時「燕雀安知鴻鵠之志哉」の諺語を教わつた。「君達一中生は常に誇りを持って、小人には大志を抱く者の心が分る筈がない。

細かい事に拘らず常に大きく前進せよ」と言われたものだ。鏑木先生の面目躍如たるものがある。晩年先生著の「藻汐草」を戴き今も座右にある。

卒業期が近づくと、世情傾に緊迫し世界の動きが激しく陸士、海兵、海機等へ進学する生徒が増え、学校教練にも熱を帯びてきた。

母校とも別れる日が近づいた十一月二十六日教室内で二・二六事件のニュースを聞いた。身が引き締まった。我々は今後どういう道を進めば良いのか語り合ったものである。大東亜戦争では多くの同窓生が散っていった。軍籍にあった私は無事復員したが、当時の童顔が彷彿として浮かんでくる。

校庭の桜花の下、青春の血を漲らせた追憶は枚挙に遑がない。

過ぎ去った日々の追想と本多町界隈をタブらせて見るが、隔世の感が深い。創立九十周年式典を迎えるに当り、物故者の御冥福を念じ、現存各位の益々御健勝ならん事を祈念して筆を擱く。

桜誓会の思い出

石崎 皓三

(一中四十五回卒)

クラス会の名称に六桜会とか八桜会というのを聞きましたが、私共四十五期も桜章校の桜を戴いて「桜誓会」となっております。

今を去る四十五年前、四人の浪人が受験勉強の傍ら天下国家を論じたうち、春秋に富む青春に胸をふくらませながら、桜章の名のもとに誓を立て将来の活躍を期そうといった処から始まったので、それが段々と使われるようになりました。当時の私共の夢はいまどきの若者の様に有名大学に入って、一流会社に勤め、綺麗な奥さんを貰って、立派な家に住み、生活をエンジョイしようなんていうことは、微塵も考えたこともなく、ひたすら天下国家を論じ、亜細亜民族の為に或は支那四億の民の為になどと、口にも出し、又そうしたことを真剣に考えた時代でした。口ずさむ歌も「昭和維新の歌」であり「馬賊の歌」であって、夜の街を高歌放吟して歩いたものです。

卒業の年の秋頃でしたか、四高、金沢高工、浪人等、金沢に残っている者が集って堅町の天狗で焼き焼を



入った者、四年から四高や陸士、海兵へ行つた優秀な者、又は途中で退めたり丁寧に同学年を裏・表で消化する者などがおりまして、三十数名減ったという訳です。併し上の学年から降りてきて同期になつてくれた者もあります。

此のことで思い出しますのは、二十年位前だったでしょうか。北間楼で同窓会があつた時、待合室に当てられた広間のあちらこちらで同期の連中が寄つて話をして居りました。そこへ昨年亡くなられた石川県政界の大御所であり、議長を務め、後、県連幹事長をやつておられた矢田富雄先輩が入つて来られたのですが、「おい矢田みんな此処におるぞ、こつちへ来いよ」と。又向うから「おい矢田、同期の連中は此処だ。こつちへ来て座れよ」と両方から声が掛かり、真中に立つた矢田自民党県連幹事長、

つついた一夜がありまして、それが集まりの始まりではなかつたらうかと思ひます。此れがその時の写真ですが、この写真の十人のうち戦死が四名、うち一名は終戦時自害し、戦後死亡が三名で、行方不明が一名、現在残っているのは二名だけです。

入学は昭和八年で確か二一〇名位入つたと思いますが、卒業は一七二名でした。一年か二年で幼年学校へ

「俺はどちらへ行つたらいいんだ？」と。矢田先輩も裏・表をやられた一人として、我々の先輩の中には今どきのようにこせこせしないで、悠々と人生を歩まれた大人物が多かつたように思ひます。又私共或る時のクラス会で、昔話から段々と気分がのつて酔う程に次から次へと応援歌が出て参りました。ところが野球部の歌になつたら、皆蚊細い声になり、しまいには消えてしまつた中で、唯



一人丁君は調子よく声を張り上げて歌い続け、終って曰く「お前らの様に五年間しか授業料を納めなかった奴は習っておらんのだよ」と。確かに彼も六年間授業料を納めた口でした。今も彼は県内一流企業の役員で現役第一線で活躍しております。現在のように、母親が学校教育にまで口出しをして留年が可憐だとか何だとかくだらんことを言って馬鹿息子に育ててしまう時代ではありませんでした。

大体私共の頃は頭が良くて軀の健康な奴は陸海軍の学校へ、頭が良いが健康に余り自信のないのは医者か役人か、学者に。名古屋大学の法学部長をやった政治学の横越英一、最高検察庁の検事をやり札幌高等検察

庁の検事長を最後に退官した安田道夫、サリドマイド奇形児の手術で世界に名を馳せ我国小児外科の創始者となった世界的権威駿河敬次郎、金の西田尚紀医学部長、今年退官した斎藤晃吉教授癌研の所長をやった越村三郎薬学博士等々です。海軍へ行つて生き残ったのは八木田喜良、山室公太の二人、八木田は戦後再び祖国防衛の第一線に立つて空将補で退官、他の海兵組は全部戦死、熊田硯郎、越田喜佐久、前川末男、大野竹好の諸兄。又陸士組も児玉哲臣、松田達郎、中川忠雄、鶴見幹作、長

沢徳治は戦死、その外、幹部候補生から将校となり、戦死したのも多かったです。

又異色として桂木鉄夫が代議士に当選したのですが、同期の連中はほんとうに良く頑張りました。二回目、三回目は政治運なく残念な結果で終りましたが……。

昭和八年四月、天下の一人に入れた喜びに胸をふくらませて登校し始めて二週間、桜の花びらが風に舞う砂利を敷きつめた朝礼場に坐らされて、五年生や四年生が壇上で演説をし、興奮した雰囲気を引きずり込まれていたことが、強く印象づけられました。斎藤大六とかいう先生を転勤させた伊藤校長糾弾のストライキだったのです。

又私共が入学した頃の本多町の校舎は、早春を告げる鶯の声が多の森から流れてきて米田なまずの化学の講義の合の手となり、我々をにっこりさせたものです。校門を入ると先ず脱帽して御真影に最敬礼をし、そして富田校長、久田校長の像に礼をして雨天体操場から教室へと入りました。今度の九十周年記念事業実行委員会の会合で、泉丘高出の若手は富田初代校長の像の再建に「我々は顔も知らない校長の像を云々……」と反対の声があったそうですが、私共は勿論、先輩も、もっと先輩も恐

らくいまの生存者で初代校長を知っている人はいないでしょう。併しそれを再建しよう、大切に守ろう等というところが、歴史になり、伝統につながるものであって、それが尊重され、受け継がれて、はじめて校風や伝統の精神が出来るのだと思います。その話を聞いて戦後教育の現実型、精神教育の未熟さ、人間形成訓育の忘却、功利主義の姿がかいま見られて、大変に寂しく思いました。



五年生の夏休みに愈々泉野の田圃の真中にある鉄筋三階建の新校舎へ、移転することになったのですが、本多町の校舎は、二高女、北陸、職業、実業、金城の各女学校が周囲にあつて、運動場への出入りや登校の際には必ず各校の女学生に出合つたものです。現在と違って男女共学ではありませんから、公園下で降りるとき電車が一緒だったとか、本多男爵の娘に会ったとかが、授業前の話題の一つでもあり、相当に興味をもつたものです。それにも増して、休憩時間にスキー場で寝ころんで空を仰いだり、本多の森の竹藪を、小川の音を聞き乍ら散歩をしたり、大変に環境のよい処でした。

私達は本当に新校舎へなど変わりがたくないと思ひました。石段が減つてしまつて、走つて勢いをつけないと上れない様な石畳みの廊下、木の節が残つて木目の凸凹の出ている羽目板。その懐かしい校舎を後にして夏休みに校旗を先頭に厳霜碑や銅像樹木などを荷車に積んで引越し致しました。成績の良かった荒川などは校旗の先導をしていたようですが、当時の旗手も戦死者の中に入っております。大体その頃は凡て成績順でして、教室では成績の良い方から順に後の席に坐り、遠足でも軍事教練や行軍でも成績の良いのが先頭で行

進したものです。朝礼でも講堂へ入る時でも総てその順でして、お祭りでお宮さんへ参拝する時など列の後尾を歩いていて女学生などに会うと一寸格好が悪いなど思つたものです。五年の二期から新校舎で授業が始まったのですが、或る日時間がなくて広小路からタクシーに六人で相乗り（当時は六〇銭、電車賃は五銭です）して、六斗林を真直ぐに学校へ。ところが運転手が正面玄関へ車を横付けにしたものですから、跳び降りた我々は靴を手にもつて朝礼場になつて雨天体操場へ一目散、列の後についてハアハア息をはずませていたところが、教練の中村岩次郎大尉、「生徒の分際で馬廻し（軍隊用語です）へ車を乗り入れて登校したものが居る」と一喝！只々恐縮をしていたことがありました。

兎に角此の五年間（中には六年、七年もあります）が、楽しく、想い出は尽きないものが沢山ありました。現在連絡のとれているのは一一五名ですが、集ると五十年の歳月を一気に遡つて昔のままの童顔に返り、戦死した連中も桜の徽章をつけた帽子を被つて笑い乍ら目のあたりに出てきます。そして此の桜誓会のメンバーは、これからは先輩になる者もなく、勿論後輩になるものもありません。最後まで同期であつて、これ以上増えることもないのです。こうした私達も昨年四十五周年を迎えたのですが、同窓会が行う創立九十周年の式典に併せて、此の秋四十五周年集会を開催することに致しました。色々と計画を立てておりましたが、未だに忙しい連中が多いので、四年後の五十周年を盛大にやろうということ、その時には我々の時になかつた修学旅行でもやろうかという話も出ております。吾校だけ修学旅行が何故なかつたかと申しますと、何年か前の先輩達が修学旅行で酒を飲んで旅館の屏風を破つたり、奈良の猿沢の池の畔で地元の中学生と集団で喧嘩をしたりした為に、我々の七、八年前から中止になつたのだそうです。あの時の修学旅行の代りに、何処かの旅館の広間で煎餅蒲団を並べて寝ようかという案も出ています。十七、八年前ですが、当時の同窓会長であつた越馬徳二津田駒工業社長の代理として、北間楼で行われたクラス会に出席したことがあります。それは大正四年卒の二十二年同期生会で、何分にも私が生れない前に一中を卒業された方々で学習院大の中川善之助教授、吉野勝太郎先生、井口清次郎井口商店社長、四井議次同窓会事務局長、医師で俳人の綱村基行先生、北陸学院の番匠鉄雄院長、鍋木勢岐尾山神社宮司、正

見二郎北陸信用金庫理事長の諸先輩たちでしたが、何とも言えない楽しそうに、そして嬉しそうに、昔を懐かしんで語っておられた姿が忘れられません。

さて、私達もその卒業五十周年を迎えようとしているのです。（石崎生一荒川君や堀口君に電話で尋ねたりして記したのですが、思い違ひなどあるかも知れません。お赦しを請う）

市場一泉会の新年会

平 石 英 雄

（一中四十一回卒）
五十九年度の新年会を二月九日夜、尾張町の「大八」で開催。大雪で交通渋滞や、市場の荷動き等の影響もあり、会員二十八名中十三名出席した。

日本一に新装成つた母校の見学や、九〇周年記念に対する協賛の件などを話し合い、キップのいい市場人として母校の意気と誇りをもつて之からも頑張ろうと応援歌を高唱して散会した。出席者は次の通り。

平石英雄（一中41）青梅洪治（一中46）土谷勇（一中53）吉竹毎謳（一中54）砂原章（一高）田村清（泉4）水野隆（泉5）北野幹雄（泉6）柿

木良一（泉7）松下一定（泉8）谷村勝吉（泉8）日尾功（泉14）柿木義尚（泉16）

一中四十・四一期生

合同本多会

去る四月七日に開催された関西一泉同窓会の総会の折、出席した四〇期生の間で、今年度の四〇、四一期生合同本多会を四月十七日（火）午後五時半から大阪市南区笠屋町の料理が美味しいレストラン「乃呂」で開くことが急に決り、早速に連絡をとり集合をかけたが、先約があつたり仕事や健康上の理由などで集りが意外に悪く僅か八名ではあつたが、何しろ一年半振りの会合であり、お互いの健康を喜び大いに語り合い、時の経つのも忘れるうちに演歌、民謡などどとび出し賑やかに楽しく過ごして散会した。

出席者は40期水落昇、千田民夫、能木場俊吉、41期八十島健二、三浦繁雄、赤崎雄七郎、谷村弘、小泉茂吉。（小泉記）

最近の恩師のことも

大蔵吉夫

(一中四十七回卒)

既に八十歳をこえられた高齢の諸先生、即ち、コース、チャン、サイレンの最近の情報を……

◇上田先生・通称「コース」

一中時代はイカメシイ、コワイ先生であった。わが四十七期から、坂本労働大臣が誕生したので、一中、四高、剣道関係等親しいものが二月五日(旧)夕、金沢名鉄スカイホテル18階に集り祝賀会を開いた。

少し腰が曲がりかけた八十三歳の先生は、マイクを片手に「教え子が大臣になったことは本当に涙が出る程嬉しい」と大声で感動の喜びの声をあげられたあの姿は、四十五年前の若々しい元気な先生の教師時代を髣髴たらしめた。



出席した同期生三十一名の輪に入り懇談されたが、教え子の名前を殆んど覚えておられ、年老いて「コース」と呼ばれると嬉しくてといわれる恩師の姿を仰ぎ、しみじみと先生の有難さを味ったひとときであった。

◇宮沢先生・通称「チャン」

毎年十月、大和で開く一泉桜美会展は、某先輩のリクエストに応え、私の出品二点中一点は必ず裸婦を出すことにしている。この絵の前で先生いわく、

「ウーン大蔵君、中学時代はスポーツマンだった君が、いつの間にかこんな絵を描くようになった。」と。

一泉桜美会展が十年以上も続いたのは宮沢先生あればこそである。クリスマスパティーには私と一緒に細川たかしの「矢切の渡し」を歌われたが仲々のものであった。絵も歌も芸術あい通ずるものがあるらしい……。底のない美の追求が人生を充実させ、活力を与える様である。先生、元気で絵、歌そして老いらくの恋も又よし、一泉桜美会展の発展の為に若々しく頑張ってください。

◇後藤先生・通称「サイレン」

昨年十月、錦秋の京都で四十七期同窓会を開いた。
先生は八十歳をこえ身体も些か不



古い写真

斎藤弥吉

(一中四十九回卒)

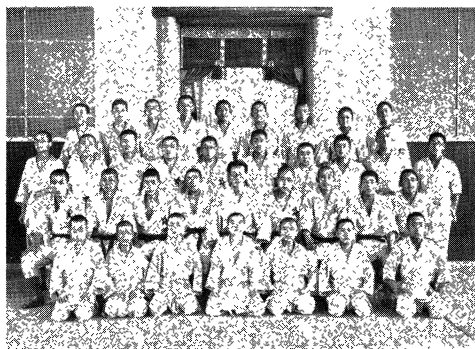
私は古い写真や自分とった写真はよく保存しているほうです。

「一泉」九号の原稿は写真添付ということで、私は曾ての柔道部時代のものを出しました。

昭和十六年五月、あと半年で日米戦争の開戦であるが、神ならぬそれは知らず、私が金沢一中五年に在学のとときの記念写真であります。若干説明しますと、今も健在な東正男先生を中央にして黒帯組が一行にならび、前列には二年生、後列が三、四年生です。前列中央には、今ときめく現郵政大臣奥田敬和閣下が坐っております。私にとっても母校同窓会にとりまして、まことに貴重な写真であろうと思います。尚、東先生の左の眼鏡をつけている美少年は、一泉同窓会副会長小川忠男氏、その左が筆者斎藤です。野村成紀君の顔も見えますが、当時小川・野村の両君は相撲もやっておりました。奥田大臣は当時二年生で、身体は小さいが全身負けん気で固まっていたことを覚えています。私とはよく練習したものでした。

(栃北鉄航空取締役社長)

又旧校舎(前泉丘高校)が改築さ



(一) 中五十四回卒

テキパキとした短い挨拶は好感がもてる。すべての挨拶とはいわないが、世界でもっとも短い言葉「俳句」をまじえることが一面おもしろい。

小、中学時代には一茶とか芭蕉とかの俳句をいくつか読み、記憶に残っている名句も数々あるものの、作ったことはなかった。それが今五十歳を過ぎて基礎知識もなしに五・七・五と季語をまじえることだけで、ガムシヤラに作り始めた。挨拶の下手な私にとって、お粗末ながらも一句がいかに大きな支えになるか教えてくれた。会合、結婚披露などいろいろな場所で作り披露することがしばしばある。

生涯俳句を続けた父の後を継いで五十八年一月から真似ごとを始めたばかりのかけ出し一年生である。北国新聞時代で学んだ編集の見出しのつけ方、着眼点も多少俳句と似かよった感じもしないでもない。それだ

けにやる気を起こしたのかもしれない。一中先輩には南秋草子氏の俳人もおられ、時折りお会いも出来そうなので心強い。あれこれと教わりながら立派な俳句を作り、精進したいものである。以下は今までに二百五十余句作ったうちの自慢の句？二十句を拾ってみた。

天寿とも　やはりさびしき

彼岸かな

春陽射す
孫すくすくと

初誕生

明易き室堂にひびく

大太鼓

みちのくの
結ぶ友情

青葉濃き

電
波
伴
壇

1958.12.9

小寺正三・進

電

波

伴

壇

道生 かんしゃう集

電

波

伴

壇

晩涼や 美女に囲まれ

酒うまし

インターハイ 瑞穂を埋めし

夏帽子

通り雨 浴衣も濡れし

踊りの輪

眠られぬ
さらに蚊一匹

氣にかかり

balan 寿し 孫もほおばる

秋祭り

木犀のこの時期が好き

城下町

病む母へ 落ち葉の紅葉

拭き届け

小さくとも
わが手作りの

さつまいも

師走火事 題目唱之

ポンプ待つ

縁起いい 大量機器の

初荷か

初夢に 亡父の励まし

聞こえけり

梅咲くも 寂しさ未だ

去りゆかず

声かけて 来そうな遺影や

雪の句座

亡父偲ぶ
後悔多き

梅
二
月

雪わだち
ハンドル取られ

身も揺るる

(株)北陸ビージエム専務取締役

第四回

関西一泉同窓会総会

松田初枝

(泉四回卒)

関西一泉会も順調に会を重ね、第四回総会は四月七日(出)、大阪北区梅田新道のアサヒビヤハウスで開催された。

風は冷っこかったが晴上り春の光が満ちて同窓会日和となった。懐かしい顔が次々に見え、次第に活気づく。各人名札を胸につけ、出席者名簿などと共に、土産に恒例となった「松任のアンコロ」二包も手渡される。

去年に続き、金沢から宮沢先生をお迎えし、事務局長の西多氏も参加下さった。今年も年配の方や、女性達が出やすいようにと、午後の会になり、出席者百余名、うち女性は十六名を数えた。

三時すぎ開会。嵯川氏(泉二回)の司会で、先ず八十島会長(一中四十一回)の挨拶。続いて西多氏の創立九十周年記念事業の説明。宮沢先生の「当日出席者の名簿をみて、昔を思い出します。今年も多勢の皆さんが集まれ、立派な会になった」とお言葉をいただく。

中央のテーブルに御馳走が盛沢山に並べられ、ビールが配られた。



(中央のマイクを持つ中川大阪府副知事)

最年長の寺西氏(一中三十四回)の乾盃の音頭で宴会に入った。バイキング形式で皆それぞれにコップ片手に賑やかに話の花を咲かせた。

先生を囲み、グループ毎に写真を撮り合ったり、元地氏(泉十三回)がカメラマンになって会場のムードをスナップ・ショットしてくれた。

専属バンドのドイツ民謡、一中の校歌、泉丘の校歌の斉唱と会は盛り上った。

一しきりの後、中川氏(一中四十七回)の音頭で、宮沢先生の御健勝

を祝して万才三唱が行われた。

名残り尽きぬ思いながら、来年の再会を約して五時十五分一応閉会。今しばしと残っている人、場所を変えてと連だつて帰る人、いい気分て歩くナニワの春宵はまだ明るかった。

一泉バレーボール同窓会

結成準備会なる

手下利周

(旧朝倉)
(泉五回卒)

一中バレー部OB会として、多川直次氏(四五回)西坂弥三郎氏(五十回)を中心に、泉丘七回生位までのOBがタッチ、フェイント、クイック、アンダーパスありの九人制バレーを楽しみ、汗を流した後、一献傾ける会を続けており、又泉丘二回から六回位までの女子や五回から十五回位までの者が、故四井謙二氏の肝入りで矢木和子氏(三回)小柳明男氏(八回)等が中心となり、それぞれ交友を深めておりましたが、小生が母校に松任高校より転任を機に一泉同窓生でバレー部に関与した者の集いを思い立ち、西坂弥三郎氏や西多外喜次氏、松任重於氏に相談した所、又本校の旧バレー部顧問であった三宅正敏先生等はぜひやってほしいとの力強い賛同を得ましたので発起人を募った所、いずれの方々も快く賛同いただき、松任重於氏(五十三回)の御尽力により、二月四日雪深い時でしたが、清風荘に十五名の発起人が集まって、五月上旬に準備会開催を決定し、去る五月十五日(火)七時より、母校の会議室にて二十余人が集まり、会長に多川直次、副会長に越田和夫、矢木和子、事務局に十名程とその他各期世話人五十名の組織をつくり、十月十三日(出)金沢ニユーグランドホテルで総会を開くことに決定し、総会に向けて行動を開始しました。当日はバレーボールを楽しみ汗を流した後酒をくみかわし旧友と交わり、恩師と語ったり、会誌発刊等多大の計画を建てております。

一中バレー部創設時の写真
(写真最上部に現会長)

ある資源

中 谷 道 子

(泉六回卒)

幼い時からの友人でフサ子さんという人がある。

フサ子さんは良家の子女で、たしかお父さんは厳格な大学教授だったと思う。美しく繊細な彼女のお母さんは、当時私の憧れであった。商家に育って朝から晩まで忙しく働き回っていた私の母とは大違いだったからである。

そのフサ子さんに昨年上京の折に遇った。

可憐な少女の面影は全くなかったが、色白のたおやかな奥様になっていて、現在の境遇の豊かさがにじみ出ている。

長い空白があったので、ホテルでの食事の後、話はつきず、そのまま田園調布の彼女の家迄邪魔するのになつた。

東京の国電はいつも人が溢れ、田舎者は絶えず周囲をみながら、電車と線路の間に落ちないよう、バッグを抱えて大変な気配りを強要されるものである。今日は東京人と一緒にから安心、と私はフサ子さんと同道した。

改札口を通りホームへ出ると、フサ子さんはツカツカとゴミ箱の方へ

向かった。

あつという間にゴミの中へ手をつっこんで真新しい週刊誌を二冊ばかり拾いあげた。

馴れた手付である。

私はアゼンとした。何事もなかったようにフサ子さんはそれを買物袋に放りこんで電車に乗りこんだ。ホームの人たちにも異和感は全く感じられなかった。

私の家に現在、猫が九匹いる。ある・シー・ズンを迎えると牡たちは処かまわずラヴ・シャワーをひっかける。

ご存知の方もあると思うが、シー・ズン中の猫のそれはまことに強い異臭である。そのくさいことといったら、香水もシャットスプレーも全く利きめがない。ただわずかに利くのはお香である。これとて一時的なものであるが、お客様を迎える時はこれを焚くことにしている。

主人や子ども達の下着、衣類などにひっかけ、長女に至っては大学入試の面接日、制服にかけられとうとう断念した事件もあった。

このシャワーをこともあろうに客布団にやったのである。

熱湯で洗ひ、来る日も来る日も太陽に乾した。シーツを洗った洗濯機迄、におい出す始末である。夕方、布団を入れた室内迄におい、とう

とう思いあまつて、私は粗大ゴミの日に上等の布団を出すことにした。大きなナイロン袋に入れて早朝に出しておいた。

お昼ごろ、そこを通りかかるとゴミの山はそのままだがその布団はなくなっていた。

私は何故かホッとした。勇氣に感謝した。

布団もよそ様へ貰われていけば又、においも変わるかも知れない。ただ拾うのはバツが悪いだけで、捨てたものだから罪にもならない。むしろリサイクルではないだろうか。

フサ子さんも同様である。

別に恥じることはない筈である。

最近、私が町会の婦人部長をやった時、天然資源の不足という、非常に大仰だが、ジュースのビンや一升ビンなど資源のリサイクルを訴え、町ぐるみで不燃物の日にそれらを集める運動をした。

最初は恥かしかったが、此頃はすっかり馴れて器用になって来た。収集場所でもいつも遇う仲間も出来た。

今度、上京の折には国電のホームでゴミ箱の中に手をつっこみ、車内の網棚から新聞も取ることが出来るだろう、と期待に胸をふくらませている。

これも廃品回収に出すことが出来るからである。

近作から

橘 地 澄 子

(泉八回卒)

お先にと帰り給ふ君追ひかねて当直の夜をひとり本開く

与へたる人形抱きてはしやぎるる病児の今朝の活気続けよ

癌取りて三年快調と告げ来たる老農のさし出す毒大さも

枕辺にわが見る友の浅黒く癌病みていよいよ彫りふかき顔

診療の合間そうざい買ひに行く露地にはのかな梅の香匂ふ

娘の生みし私生児見むと訪院せる老女何思ふ笑み浮べる

盆近き診療室になまり聞くわが故郷より帰れる患者の

ひとときを書読むわれに氣遣ひて夫さりげなく洗濯物干す

夜たけて辞書繰る吾娘のまろき腕まろきがままに育ちてあれよ

我と同じ四人の子持つ友病みて異郷に果つと聞く夜は長し

彦根日赤病院内科医

(旧名 武藤)

われらが同窓会



福田 太睦

(泉八回卒)

昭和三十一年卒業後、五十五年夏
一〇〇名余参加の泉丘高校八期生同
窓会開催をもとに、名簿完備すべく、
正確な基礎資料をと、住所、勤務先
等確認の往復ハガキを発送し、あわ
せて近況を記入願ひ、ユニークな会
誌を編集、この間一年余の世話人各
位の協力及び一中四十一回生の先輩、
平石英雄、西多外喜次(一泉同窓会
事務局長)両氏の御指導のもと徹底
した調査の結果、ここに名簿が完成
した。以来毎年全員に一年間の同窓
会行事、連絡、不幸等近況を記した
年賀状、年刊「八泉」を発行してい
る。例年十数枚が移転先不明等で返
却あり、転勤等の多い年代、再調査
し回送している。不明の人を何とか
探し出した時の当方及び相手の喜び
は大きい。

おかげ様で今日現在、五〇五名卒
業し、十三名亡くなられ、数名の不
詳者迄と名簿が完備しており、同窓
楽しい。

会の基本の為に今後共努力したい。

今般母校九十周年行事の賛助金に
ついては、各クラス世話人打合せの
結果、全員に案内すべきと一致し一
口一〇〇〇円、女子一口、男子二口
以上お願いした。

約三〇〇名が全国より貴い協力の
結果、約八十万円の総額となり、社
会の中堅として当然ながら、感謝を
こめ、四十万円を学校へ、残りは八
期生今後の維持運営費も出来た。

今迄、さしたる資金もなく、連絡、
調査等個人願ひであつたが、二、三
年は活動出来るとホッとしている。
これも各クラスの世話人がしつかり
し、多くの人達が協力や、奉仕のお
かげ、そして、とりわけ一泉事務局
を連絡窓口を利用させてもらひ、指
導連絡下さつたことを、あわせて感
謝申し上げます。

近年同窓生、宮本浄子さんが変身
し、犀川辺りビルにラウンジ「ボル
トール」を開業した。何かと理由を
つけ、同窓会、打合せ会と仲間が会
うごとに、二次会はきまつて集ると
ころ。一中先輩も多い。出張帰郷し
た折、寄る仲間にも会う。一泉会、八
期生のラクガキ帳有り、近況、サイ
ン、意見等酔う程に気楽に記してい
る。三十年前の学生気分にもどろ、
「学生割引だ」と値切れる店が、又
楽しい。

脱サラ・
白馬乗鞍スキー場へ

滝川 徹

(泉八回卒)

就職シーズンが始まるとテレビの
画面は会社訪問の学生達の長蛇の列
を写し出す。そのベストテンに入っ
ているT海上火災を四十五歳で中途
退職した。しかも二十年間も住み慣
れた大阪を離れて、冬は積雪三メー
トルを超すといわれる信州は白馬山
麓の小谷村へ一家四人で移り住んだ。

標高八〇〇メートルの小谷高原に



は、鶯や郭公が鳴き、樅の芽、コゴ
ミ、蕨などの山菜の豊庫で、兎や狸
など小動物も住み着いている。夏で
も掛布団がいる位に涼しく、ロビー
より白馬の山並が眺められる。春か
ら秋のゲレンデは羊の牧場となり、
そして冬はスキーの季節である。東
京や大阪より若者達が都会の風を運
んでくる。14基のリフトをもつゲレ
ンデは色とりどりのウェアの花が咲
き乱れる。その裏でロッジサイドは
大忙しである。十二月中旬より四月
上旬まで、居候学生達と共に一泊二
食五、〇〇〇〜六、〇〇〇円のスキ
ーヤーを迎えては送り、送っては迎
える一〇〇日間の戦いである。都会
よりゲレンデ迄の直行バスが主流を
占めてから、その日に泊る人は早朝
に着き、又帰る人は夜に発つのでロ

ツジ内は二倍の人達でござつた返す。除雪はブルドーザーで朝夕行わなければ駐車も出来ない。ほつと一服でできるのは昼間の三、四時間だけである。

そんなシーズンが過ぎると都会の若者達は潮が引いたようにゲレンデから去つてゆく。

雪が融けると赤や青や色とりどりのロッジの屋根が静けさの中にとり残される。まさに北欧の風景画を見ているようだ。

手元に届いた一泉同窓会会員名簿をパラパラ捲つてみたが、一泉同窓生二万余名の中で「ペンション業」は私だけのようです。是非、スキーに、避暑にご利用下さいませ。

北京に赴任して

泉 新次

(泉九回卒)

期待と不安をいだきながら北京空港に着いたのは四月十三日の正午(北京時間)です。空港には、日本人学校の子供達多数と父母会の役の方、現職員が迎えにきていました。

伸び伸びした子供達を見て、特殊な環境にいるエリートの子や父母はいったい何者だろうかという不安がつるばかりでした。どんな教育を、どの様な接し方をすれば良いのか、

やや自信を失ないかけました。あれから二十日間、子供や親、教職員のすばらしさと共に、本質的に日本にいる人達と変わらない事を知り自信を取りもどしています。

今年は、前職員と大使館の尽力によりホテル暮らし三日間で五人全員アパートに入る事ができました。今まで早い人で夏休み頃、遅い人で一年間ホテル暮らしだった事を思えば大変恵まれています。北京では外人居留区がいくつもあり、外人専用のアパートが建ち並んでいます。大使館やアパートの入口には全て人民解放軍兵士が立ち四六時中警備にあたっています。世界一治安の良い国にいてこの様なわけですから安心して生活ができます。

私のアパートは4LDKで、北京の北東にあり各国の大使館が広い敷地にゆつたりと建ち並んでいて、学校まで歩いて八分ぐらいの所にあります。静かな高級住宅地といつてもいいでしょう。

しかしベランダのドアが開きにくかったり、便所の水が止まらない、浴室の天井から水滴が落ちる、電灯がつかないという様にしょつ中故障がつきものです。修理してもらつてもすぐ故障するというあり様です。コンセントもいろいろな形がありまして、それともきちんと入らず、すぐ

抜け落ちたりします。スイッチも上へあげると明りがつくものと消えるものがあり一定していません。ですから今では修理屋を呼ぶよりも自分で研究し直した方が良くと悟りきっています。創意工夫が教育上ばかりでなく生活上も必要だという事を痛感しています。

私達は日本大使館嘱託という身分ですが、公用旅券を使用し大使館員並の待遇を受けています。アナカン(航空別送手荷物)で四〇〇kg程送りましたが、生活必需品という事で中味も調べられることなく無税となりました。車も無税になったので安心です。

生活必需品は前任者より譲り受けた物もありますが、まだまだ足りないので毎日買い物に出ています。外人専用の友誼商店へ行けば一応なんでもありますが種類は多くありません。日本製のしょう油、コーヒール、インスタント食品、お菓子なども出まわっていましたが三〜七割高です。家具や加工食品は日本より三割程安く、その他の食品は殆ど殆ど同じです。工賃や入場料は安く散髪が三人で五元四〇角(約六〇〇円)北京動物園が一人一〇角(十一円)です。

中国人は石づくりの家に住みほとんど人民服ですが、背広姿や色彩豊かなブラウス姿も見られます。全て

貧しく、きたならしく見えますが、私達も四十年前はこの様な生活じゃなかったかと思っています。その頃、高級住宅に住むアメリカ人を特別な目で見たものですが、今度は、私達がそう思われているのかもしれない。

北京日本人学校は、日本の大使公邸を借りて授業をしています。教室は狭く二十人が限度ですが、三年生は二十九人もいて身動きもできないありさまで、私は六年担任で、自分のクラスの国語、理科、図工、体育、音楽、道德の他、小一、四と中学の音楽を受け持っています。私は一週二十四時間ですが、お昼は家で食事をするのでかえってあわただしく仕事ができます。ですから六〜七時頃まで残つてする事も多々あります。教室は鉄筋のせいか反響がはげしく大変騒々しいのですが、机や椅子の足に全てゴムがついているので救われています。校庭はバレーボールがやつとできるぐらいの広さでコンクリートですので体力のおとろえが心配です。現在の人数は百三十人ですが、どんどん増加する傾向にあります。子供達は六台のスクールバスで登校してきます。学校の行事にもバスが使えますので大変便利です。職員は二十四名です。六年生は東京周辺(首都圏)ばかりで、オース

トラリア、パキスタン、ハワイ、ニ日は香山という山ヘリフトで登りま
 ユーヨーク、パリ、サイゴン、イン
 ドネシア、ケニア、スコットランド、
 シンガポールなどの海外生活体験を
 持っている子が半数です。

学校では自分の事は自分でやらな
 いとだれもやってくれません。先日
 もコンクリートの壁に穴をあけ時計
 と黒板をつりました。学校は一日
 中開けっぱなしですから、いつでも
 自由に出入ができて便利です。小一
 中三まで同じ校舎で学び、同じ居留
 区に住んでいるのですから家族の様
 な人間関係ができています。先生方
 も全員の子を知っていますし非行少
 年など生まれる余地はありません。

四月二十九日(日)には、先生方家族
 全員の親ばくをかねて念願の万里の
 長城へ行きました。高い山の尾根づ
 たいに築かれた長城を母も含め家族
 全員歩き、二千年有余前の中国の歴
 史を肌で感ずると共に、その壮大き
 に心うたれました。五月二日には、
 はじめて車を借り市内を走り回りま
 した。まだ中国の免許証をもらって
 ないので無免許運転です。歩行者の
 ための信号はないので赤でもどんど
 ん渡ってきます。車は自転車と人の
 間をぬって走るのですから大変疲れ
 ます。こちらは五月一日〜六日まで
 休みです。早く中国の社会に慣れよ
 うと思い、三日は北京動物園へ、四
 れします。

隣はネパール大使館ですが二男坊
 は毎日遊びにいつています。上はオ
 ランダ大使館の方ですが、奥さんは
 日本人です。子供さんは英語、日本
 語、オランダ語は自由に話せます。
 又ナショナルスクールは毎日中国語
 があるので中国語も上手です。アパ
 ートは外人ばかりですが黒人もたく
 さんいます。国籍も言語もさまざま
 で国際色豊かです。買物に行つた
 どたどしい中国語で話していると、
 “Can you speak English?” とかえつ
 てきます。やはり、英語が大切です
 ね。

北京は日本より暖かく晴天続きで
 す。赴任して四日目に降った雨が今
 年はじめてとか。そのせいか空はい
 つもかすんでいて鮮明ではありません
 せん。又室内の至る所に黒い砂ばこり
 が積もっているので掃除が大変です。
 だれかが北京砂漠だと言っていたの
 がうなづけます。しかし、広い道路
 の両側にならず二〜三列の並木が植
 えであり整然としています。朝の空
 の気はひんやりとしてすがすがしく、
 この青葉茂る木立の間にジョギング
 や太極拳をしている人の姿が見え隠
 れします。

間もなく私の中国語のレッスンは
 始まります。中国語の勉強、学校の
 整備、教材研究など、中国の社会勉
 強と多忙な毎日が続きそうです。北
 京は今、柳じょ舞う最高の季節をむ
 かえています。みなさんもぜひ一度
 中国へおいで下さい。

泉丘十期生

関東泉寿会新年例会開催

大谷孝弘

昭和五十三年八月、泉丘第十期卒
 業生の会「泉寿会」が発足し、次い
 でその翌年一月に、関東在住者の会
 「関東泉寿会」が発足。以来、毎年
 一月末の日曜日午後二時より、都内
 の会場にて新年例会を開催していま
 す。

現在、同期の関東在住者は実に、
 百余名を数え、毎年五十名前後の参
 加を得て、お懐しい恩師の諸先生を
 お招きし、和気あいあいのうちに開
 かれていきます。

本年も一月二十九日に、都内渋谷
 区のホテル「渋谷東急イン」にて、
 第六回目の新年例会を開催いたしま
 した。来賓として、西野哲也先生、
 長谷場千鶴先生をお招きし、また金
 沢から越野宗郎君、浅香以都子(旧



姓中野)さん、野尻八重子(旧姓山
 口)さん、遠く鳥取から脇和子(旧
 姓山岸)さんの出席を得て、なごや
 かな交歓の場となりました。

これまでも両先生の他に、松川
 一雄先生、布山清吉先生、山崎裕先
 生、香村忠先生、浜名久雄先生に金
 沢からご足労いただき、関西や東海
 地方からの参加者も加え、それぞれ
 過ぎし日の青春をしのび、お互いの
 今後の健闘を誓いあい、二次会等を
 混じえ、夜遅くまで歓談しております。

私の履歴書

浅 香 以都子

(泉十回卒)

私は、泉丘の十期生。昭和十五年生まれ。敗戦の時は幼稚園。富山の戦災が夜空を赤く染めるのを見た。二十一年。戦後教育の真正正銘の一期生として、新しいランドセルも与えられぬまま、小学校に入学。

高校進学率が五二%だった三十年、泉丘に入学。翌三十一年の『経済白書』は、「もはや戦後ではない」とうたっていた。その年の十二月、金沢でもテレビ放送開始。テレビが家庭に入る前に大学進学。

今後とも、毎年一月末には、新年例会を続けて開催していくことを、参加者一同で確認し合っており、ますので、ますます盛会となりますよう、まだ関東在住者で、一度もご参加願えない方には是非ご参加いただき、また関東以外の方でもご都合のつく方は、ご一報いただければご案内状を送ります。どうぞご遠慮なくお申出ください。

以上、同期会の活動の一端をお知らせいたしました。

終りにあたり、母校のますますの発展を祈念してやみません。



だ十期生も、その大半は、今年四十五歳。一中・泉丘の年輪の半分を生きてきた計算。

娘も、「永劫に学び勿絶えそ。岩のごと校舎は立てり」の、あの校舎で受験。あの講堂で仮入学式。現実の高校生活は、マンシヨンのような新校舎とともににはじまり、目下、成績の「中流意識」を体験中。それは、それ。

豊かさの象徴のような新校舎には、それにふさわしいなかが注がれる。「若人に自立のころ」を指し示さねばならないはずの仮入学式に、今年が親が同伴。「泉丘らしさ」の表現であつたはずの、特別な行事が何

一つなかった学年末の日に、終業式が初登場。

私たちの胸中にある「泉丘らしさ」は旧校舎とともに消えたらしい。新しい「泉丘らしさ」は、「共通一次試験」十八歳の戦場」のロケ現場が示してくるのであるうか。

貧しさのなかで勉強できた私たちは、幸福であつた。豊かさ、それも外観だけの豊かさに囲まれた今の泉丘で、人間として必要な本物の勉強をするのは、世間が思うほど容易なことではないはずである。そのなかで、本物の勉強に挑む若人に、幸あれと祈る。

三十五年の「六十年安保」では、学生は学生らしく行動。しかし、新安保は成立。その年の暮には、「高度成長・国民所得倍増五年政策」が声高になる。ベビーブームが高校に進学するのと同時の三十七年に大学を卒業。高校教師として就職・結婚。四十年、芝生のあるマイホームを購入。この時、泉丘教諭だった主人は三十歳。戦後生まれが成人式を迎え、「一億総中流意識」が定着し、「高度成長」のひずみが拉がるなかで、子育て開始、それから幾年月。



(旧泉丘の相撲場)

祝創立九十周年

城丸 蓉子

(泉十五回卒)

一世紀近い年月、築かれた歴史と伝統は、名実共に立派だと思えます。思い起こせば、当時、学校のまわりには、緑が多くあり、四季おりおりの情景が、今、脳裏にうかびます。春、満開の桜の美しかったこと、その下で輪になって用いたお弁当、夏、太陽の下で汗を流し、秋には文化祭や運動会に若いエネルギーをたぎらしました。

高二の冬休み、体育の先生に引率されて、参加した白馬山麓での一週間のスキー合宿も忘れられない思い出のひとつです。

女子の制服がスーツ型に改められたのも、たしかその頃でした。

卒業後、社会に貢献できたとは言いませんが、校風「質実剛健」の気風は、ずっと私の中で生きています。

十五期生は、二年毎に同窓会が開催されますが、毎回の出席は無理ながらも、コピーされた、友人の近況報告が寄せられ、それなりに参加できるのです。

昨年は卒業二十周年にあたり、これもひとつの区切りと思い、主婦に



は忙しい八月十三日でしたが、万難を排して出席いたしました。

同期生のひとり、携わる方があり、国際ホテルに布山先生、松川先生、安高先生、中本先生の四恩師をお迎えし、八十名ばかり集いました。

尊敬してやまない諸先生方のかかわらぬお姿に心組み、なつかしい面々

は、卒業以来の人もあって話題は尽きず、なごやかなうちに予定の時間はあつという間にすぎました。

二十年という歳月は、青春時代をなつかしむ心地にさせるものです。再会を約し、それぞれ帰途についたのです。

思い出多く、愛着の残る旧校舎は、伝統の重みを感じさせるものでしたが、教室のうす暗さは、今の学校とは比ぶべくもありません。今、目を見はるような、新校舎完成を機に、輝やかない伝統がひるむ事なく、一層発展されますよう、願っています。

(旧姓新村)

再び、幸福とは…

小西了介

(泉二十六回卒)

先だって、ほれた女性の写真を人にみせたところが、「こんな女どがいいんや。俺なら絶対声かけんな」と。無神経にも言い放たれてしまった。こんな経験は、誰しもあるものではないだろうか。まさしく、「夢喰う虫も好き好き」人の好みは千差万別であるが、人が「これが自分の幸福だ」というものも、同様に様々であることは、よく言われていることであろう。

「幸福論」についての本や文章は、古今東西あらゆるものが出版され、多感な青春時代初期には、それこそ「山のあなたの空遠く」まで探すべき、熱心に読んだ覚えのある人も多いことだと思ふ。しかし、年齢を重ねるにつれ、いつしか「何が幸福？」などというような観念的なことは考えなくなり、目先の末鎖なことに喜びを見出し、仕事やマイホームなど、現実に目に見えるものを達成したりすることが生きがいとなっているのは、私だけではないまい。

「親しい友人との語らいの時間」

これこそ、私にとっては幸福な時間だ。とくに、学生時代の友人は、大人になるにつれ誰しも自然と身につけていく鎧(よろい)や仮面を、全く脱ぎ捨てて話ができる仲間だ。お互いに、長所や短所は知り尽くしている。当時は、少年らしい純粋さで、友達のことを真剣に心配し考えたものだ。今後こうした友人をつくることができるだろうか。やはり難しいのではないかと思う。

しかも、学生時代の友人の数は限られている。減ることがあっても、増えることはない。何をおいても大切にすべきものだと思ふ。そのためにも、同窓会の灯は消したくない。

一部で、同窓会について誤解している向きもあるようだが、その方達は、

もっと大きな見方で、宝の部分に目を向けてほしいものだと思う。

最近、学生のUターン現象が顕著で、「地方の時代」も叫ばれている。こうした社会の動きの背景には、多くの人々の心の中で、「親しい友人と楽しく語り合う時間を持ちたい」という、人間らしい願望が強く芽ばえてきていることがある——とみるのは、あまりに小市民的であろうか。

追 想

仕 道 義 松

(通信制八回卒)

本年は泉丘高校創立九十周年を迎え、校舎の装いも新たに新築されましたことを、心からお慶び申し上げます。

さて、通信制も開設されて以来、三十五年を数え、今日迄卒業生も一、二九三名を送り出し喜ばしい次第です。私も学んだ一員として、充実した教育を受けた恩恵を噛みしめています。

私が、通信制の入学にあたり、係員が「貴方の入学の目的は？」と質問され、即座に「卒業です。」と答え、た記憶は今尚忘れません。当時、年齢も三十半ばを過ぎた者が入学して、無事卒業出来るかとの疑問を持たれ

たことと思います。

入学以来、いろいろな機会を通じて数多くの人々と接した中で、学習・生徒会活動等を通じ、働きながら学ぶ「職業人」というハンディを越え、共に語り合い励まし合い、貴重な体験は苦しくもあり、又楽しい学校生活でした。卒業した後、はじめて学習の楽しさの実感が湧くものです。

今年の通信制卒業生の馬場宏さんは、通信制開設以来の生徒として、年齢も最高齢で通信制三十五年の歩みの中で、暗れて卒業という偉業を成し遂げられました。本人は「人生は何時迄も勉強が大切で、生涯にわたって学習する。」と語っておられます。私達も一度はその言葉を聞き、又語り合い、将来を夢見た事もありました。馬場さんには、通信制で学んだファイトを持って、粘り強く今後の発展を期待するものです。

高校卒業というタイトルは、人生に於ける一つの過程であり、更に大きな目的に向って取り組む意欲は、人間として素晴らしい価値があると思います。

「千里の道も一歩から」というように、力強く人生を歩むことが大切だと思いますが、この点、馬場さんは私達の見本であると感じています。若い人に負けないファイトこそ、老

私達同窓生は、通信制の発展の為に第二、第三の馬場さんが卒業されんことを祈念いたします。

後輩達よ

滝 田 久 枝

(通信制十回卒)

一泉同窓の皆様お元気ですか。学校を卒業して早、十余年の年月が過ぎました。今年は例年になく寒波が居座り、春がなかなか北上してくれず、寒暖計とにらめつこの毎日です。

三月も中旬を迎えると、私の職場は新入社員の入入れで毎日活気づいています。

若い女性が原動力となっている繊維会社には働きながら学ぶ勤労学生が沢山いますが、私もその一人でした。現在は後輩のお世話をする仕事に従事していますが、最近、若年層の勤労学生の学習意欲が減少しており、大変残念に思っています。寮内の各部屋を訪問してみても、リポートや教科書を開いている人は皆無に等しく、音楽や、おしゃべりに夢中になっている彼女達の姿に「後輩よしっかりして！」と叫んでしまします。泉丘の諸先生もあの手、この手で生徒を指導しておられます。各ク

ラス毎に文集を発行したり、先生宅でキャンプや、クリスマスパーティーなどの行事を計画してくださるので、すが参加する人が少なく、集団で一つのものごとをするのが苦手な現代の若者達！……

昨年十二月、新校舎で文化祭が催され、私も久しぶりに校門をくぐりましたが、心が重く校舎の中を見学する余裕がありません。それは、あるクラスの生徒全員が発表会に抵抗を示し、一向に練習している様子が見られなかったからなのです。後座席で、全員参加してくれることを祈に祈りながら、内心ヒヤヒヤしながら観ていた私の気持とはうらはらに、彼女達は全員、創作舞踊を見事に演じてくれたのです。彼女達の話によると、いつも後番勤務が終わってから深夜二時から三時頃まで練習していたとのこと。息をはずませ瞳をキラキラさせながら全員満足そうな笑顔で語ってくれました。若者は大人に對して、表面では反発をしながら裏面では一生懸命努力しているのを知り、大変嬉しく、又、自分自身深く反省しました。

後輩達よ！自信を持って！私は素晴らしい後輩と会えて幸福です。

忘年会を兼ねての同窓会

生瀬谷 久男

(通信制二十四回卒)

「御無沙汰ばかりして、みんな元気があったの？」の挨拶から始まり、今年も例年通り、第三回の忘年会を兼ねての同窓会が十二月四日(日)、山岸先生をお迎えし、計十二名が北陸電信電話会館に顔をそろえた。

冒頭、一年間のクラス三十一名の動きや出来事、学校の行事(振興会、記念行事)などを報告し、先生の乾

盃の音頭で進出した。みんな酒が入ると、在学中の事、家庭や仕事の事、また、この会の事などに話の花が咲き、懐かしい大声や、独得の笑い声が、あちこちから聞こえてくる。

自分も負けじとカラオケで一曲披露、和気あいあいの中で時間も過ぎ、そしてこの会の名称を、入学年に因んで「五・二会」とし、来年には今日の出席者が必ず一名を誘うことを約し、「来年また五・二会に集まろう」を合言葉に散会した。



泉丘五四会の親睦会開催

中田 佳郎

(通信制二十六回卒)

我々、通信制五十四年度入学生は、年齢差にかかわらず、共に机を並べ、学び卒業と同時に「さようなら」の一言で別れてしまふのは寂しすぎないか。この出会いを大切にしていこう!ということと希望者を募り発足いたしました。

十月六日、金沢市大工町「よし村」にて卒業後初めての親睦会を開催いたしました。当日は通信制の運動会が行われた日であり、在校生は運動会終了後参加してくれました。(通信制では四ヶ年で卒業する人より、仕事・家庭等の都合でそれ以上で卒業する人が多い)

卒業生は、卒業し安堵感の反面、在学中をなつかしむ声が多く、在校生は卒業を待ちわびる気持、また、マイペースで勉強を楽しんでいる方等、思い出話に時間のたつのも忘れないひとときを過ごしました。

最後に、在校生は一日でも早い卒業を!と励まし、次回の開催を約してそれぞれ家路につきました。

当日は運動会のお疲れのなか、中村喜久治先生、川端美代江先生の御

出席、有難うございました。
出席者は次の通りです。
中村、川端両先生、表川登志江、齋藤博、境田たみ、隅田外枝、山下厚

子、山本洋子、石井光彦、和田井芳子、道場優吉、室弥太郎、森正三枝子、山岸千鶴子、中田佳郎、他一名。

一泉短歌

アテネの旅

赤井 直恭
(中三十二回卒)

また会へた「白熊さん」をなつかしみアンカレッジの空青く日は照る(83・11・9)



夢にみしアクロポリスよ岩かげにひっそりと咲く蒲公英二、三

(83・11・27)

葛まとふこの洞窟にソクラテス幽囚されしか吹く風寒し

あごひげのもじやもじや男女つれバルテノンの丘汗かきのぼる

薄日さすアテネの街をさまよひて骨董店に古代をさがす

ソクラテスもプラトンものこの町を歩きしかの猫の影に遠き歲月

(アテネ)



ピレウスの海の青さよカモメとぶ港の朝はまだ静もりて(アテネ近郊の港町)

暮れなずむエーゲー海に手をひたし瞳こらして小魚を追ふ

島の家白く光りて魚売る漁港の市場にひと群がりて(エギナ港)

海ぎわの椅子にもたれウゾ飲めばその強き香に酔ひぞいます(イドラ島)

(註)

ウゾはギリシアの地酒でアルコール40度、デイモクリトスの画像がレッテルになっている。

(朝日社友、元早大講師)